
満月の騎士

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満月の騎士

【Nコード】

N3460B

【作者名】

雨月

【あらすじ】

どこかで聞いたことのあるような名前の主人公はある時、幽霊の憑いた木刀を手にいれる。さて、これからどうなるのでしょうか・
・悪魔も天使も関係ない？お話。

剣（前書き）

皆様、明けましておめでとございます。新年早々、連載開始させてもらいました。

剣

一、

とある日、少年がなんとなく町を歩いていると・・・武道具店が目に入った。その名も、『蚯蚓腫れ』という、なんとも変わったネーミングセンスの武道具店であった。そのネーミングセンスに惹かれ、少年は立て付けの悪い引き戸を引いて店内に入ったのであった。

「いらつしゃい・・・」

店内には一人の老人が眼鏡をかけて新聞を読んでいるところであった。少年は別に武道なんかやっていないが・・・近くに置いてある木刀などを眺めていた。彼は今日、高校に行かなくてはいいが、病院に行った帰りなのでよしとしよう。大体は安静にしておかないといけないのだが・・・

おじいさんが新聞を読んでいて、近くで少年はずっと木刀を眺めていた。客観的に見てみると、二人とも暇そうに見える。少年はずっと木刀を眺めているだけで別に買う気はない。また、おじいさんも大負けを喫した競馬の欄をただただ、ほうけるように眺めているだけであった。・・・この店に時計がないことが残念だ。どのくらいの時間が経っているのか非常に気になる。

そして、途中経過から再び結構な時間が経ったときようやく、おじいさんは重たい腰をあげた。

「・・・少年、冷やかしはお断りじゃよ。」

「・・・すいません。あの、ええっと・・・この木刀って幾らなんですか？」

少年はまさかおじいさんが話しかけてくるとは全く思っていなかった。ので少々戸惑いながらも言い訳を口にした。おじいさんは少年が手に持っている木刀を上げ上げと眺め答えた。

「それは売れんのう・・・わしの孫娘の形見じゃ。」

「あ、そうですか・・・。」

そこまでおじいさんは答えると、今度はジグソーパズルをどこから取り出し、作り出した。

キュートな猫の大きいサイズだ。

結構な値段になっただろう。それを少年は見届けると、手に持っていた木刀を元の位置に納め、また、木刀を眺め始めた。何故なら、この店には木刀以外、全て売り切れだと書かれていたからである。買う気もないならさっさと家に帰って寝ているといいたいが・・・少年はずっと木刀を眺めているだけだった。

少年がふらつとこの店に入ってざっと二時間近く経ったに違いない。おじいさんのパズルも約三分の一は終わっている。子猫の姿が見えてきている。

「・・・なあ、少年・・・そんなにその木刀が欲しいのか？」

「え・・・。」

少年はどう答えればいいのか迷った。自分としては別に剣道や居合いをやっているわけではないのだが、欲しくないと言えば嘘になる。しかし、先程この店の店主であるおじいさんは売れないといったので買うことは不可能と思われる。

「……少年の根性には負けた。その木刀は君のものじゃ。持つて行って構わないよ。」

「え……あ、ありがとうございます。」

少年はそのまま木刀を持って店内にすばやく出て行ってしまった。店主の気が変わらないうちにと言ったところである。しかし、店主の話はまだ続いていた。何故なら、少年を見ておらず、専ら、パズルに集中していたからだ。

「……まあ、よくその木刀を持って行ってしまった連中は直に返しに来るけどな。何でも、その木刀を近くに持っているとかに見られている感じが毎日するそうじゃ。……わしの孫かも知れんのう……。」

そして、おじいさんはそこまで言って顔を上げた。しかし、既に少年は店を出てしまったらしく、いなかった。

「……?どうやら、わしも呆けてしまったようじゃ。客でもいるかと思ってしまうていたからのう……。おや?売れ残っていた孫の木刀がなくなってしまったのう。とうとう、店のものが全て売れてしまったから、店を閉店して売上金でどこかに引っ越して幸せな老後でも暮らそうかのう。」

そしておじいさんはパズルを再開する為に再び視線を下に向けたのであった。しかし、そこでおじいさんは思い直してパズルを作る手を休めて引越しの準備にすばやく移りかかった。後に聞くと、誰かが耳元で善は急げと言ったかららしい。

そして、そんな店主から木刀をもらった少年は自宅のベッドに寝

転がると急に容態が悪化し、それから丸一日はベッドの中で過ごさなくてはいけなくなった。木刀がもたらしたのではなく、一時間以上、外にいた彼が悪いのである。つまり、自業自得といったところか……。

「……………」

少年が丸一日後、つまり、木刀をおじいさんからもらった次の日、事件は起こった。病気も治り、大事をとって学校を休んでいた少年は大好きな読書に耽る事にしたのであった。この前、買ってきた文庫である。しかし、何故か知らないがいつものように集中して読むことができない。何と無くだが、誰かに見られている気がするのである。

「……………」

周りを見ても自室には当然誰もおらず、彼を見ているのは微笑んでいる家族の写真だけであった。

結局、気のせいだと思って読書に戻るが……今度は耳に吐息がかかったような気がした。びっくりして後ろを振り返るが……やはりそこには何も無く、いつもの自分の部屋があるだけであった。とりあえず、読書をしていても集中できないと思った少年はベッドの中に入り、眠ることにした。彼としてはまだ、病気が治っていないと思ったからである。

「……………ふあ。」

短く欠伸をして少年は膨らんでくる妄想を頭の使わないスペースに無理やり押し込み、そこに鍵をして、ただ寝ることだけを考えた。しかし、うとうとしていると再び、少年は誰かに見られているよう

な感じを覚えて・・・目が覚めた。どうにも、眠ることはできないようだと感じた少年は小さいころに読んでいた絵本を引っ張り出し、声に出して読み始めた。彼が小さい時代・・・帰って来るのが遅い両親の代わりによく自分で読んでいたものだ。そんな感じで昔を懐かしみながら絵本を読み始める。

「・・・昔々・・・おじいさんとおばあさんが山に住んでいました。おじいさんは山へ芝刈りに・・・おばあさんは川に洗濯に行っていました。」

「うんうん、それで？」

自分の耳元で誰かの声がしたのを少年は聞き逃さなかった。まあ、耳元で何かを言われたら普通は聞き逃さないだろうが・・・。そして少年はとりあえず話を進めることにした。

「・・・ある日、おばあさんが川で洗濯をしていると・・・川の
上流から・・・」

「大きな桃が流れてきたんでしょ？」

再び、少年は誰かの声が耳元で聞こえるのを感じた。

体が硬直するのが自分でも分かってきた。いや、全体的に体が固まってきたのを感じてきた。とある部分は縮こまっている。少年は思った。これがお化けという奴なのかと・・・。まあ、このまま黙っていて何も始まらないと思った少年は物語の先を読むことにした。しかし、この先は少年の耳元で先程から喋っている人物が答えた答えではない。

「・・・斧を持ったおじいさんがあつぶあつぶしながら流れてき

たのでした。おばあさんは急いで家まで飛んで帰ると物干し竿を持つて川に戻り、見事おじいさんを助けることに成功しました。」

「・・・・・・・・。。。」

耳元の人物は黙ったままであった。少年はいつものように眠気が襲ってきたので、このまま行けば眠ることができると考えていた。

「・・・・・・・・その後・・・・おじいさんを・・助けたおばあさんは・・・・警察から・・・・感謝状・・・・を・・・・送られました・・・・そして・・・・。」

絵本をベッドの下に落とし、少年は眠りに堕ちたのであった。

落ちた絵本の題名は『人助け物語』と言ったものであった。何でも、様々な人助けが書いており、その話を聞いて育った子どもは御節介焼きに育ってしまうといった一品である。そして、その本の思惑通り少しばかりの御節介焼きの少年は道で困っているおばあさんを助けたいが・・・・助けることのできない夢を見て切ない気持ちで目を覚ましたのであった。

「・・・・時雨君、晩御飯よ？」

「・・・・・・・・？」

少年は階下で誰かが自分に対して発した言葉で目を覚ました。窓の外は既に真っ暗であり、大きな満月が半分ほど、顔を出していた。

「・・・・・・・・ちょっと寝すぎたかな？」

寝る前のことを思い出し、ついでに、落とした本のこととも思い出

して少年は本を拾おうとして固まった。

本がいつの間にか自分の机の上に移動しており、とあるページが開かれていたからだ。少年はその本に近付き、なんとなく、開かれているページを見てしまった。そこには、マジックで何か文字が書かれていた。

『なかなか、為になる本だったよ？』

少年はこの家にここまで字がうまい人を知らなかった。少年の顔は青いペンキを壁にぶつけた様な色になった。しかし、取り乱すでもなく、呟いた。

「……父さんが書いた本が初めて誉められちゃったよ……」

青い顔のまま少年は階段を降りていき、少年の顔を見てしまった、彼を母親の代わりに育てている親戚のおばさんは驚いたのであった。少年は心配をかけるのがイヤだったので酸欠だといって更におばさんを驚かして失神させてしまったのであった。その後、病院に電話をし、救急車におばさんに乗せる間に少年は帰宅の遅い自分の兄妹に置手紙を書いて自分もその救急車に慌てて乗り込んだのであった。彼のおばの倒れた理由は少年が酸欠だといったことだったが……お医者さんからのご意見は過労が原因との結果であった。

「……十分な休養を摂れば直に元気になるよ。」

そうお医者さんに言われ、少年は頷いてベッドで眠っている自分のおばを見るのであった。まだ、歳は若く、少年と一緒に町を歩いている姉弟と見られたりすることもしばしばあった。

「二、三日大事をとって入院させておこうか？」

「ええ、お願いします。」

少年はそういつて起きるといけなからとお医者さんに言われてお医者さんと一緒に外に出たのであった。病院の外に出て、そこから歩いて家まで向かう。そこまで距離は離れていないので少年はさつさと走って家に帰ってきたのであった。妹の靴があるのできつと帰ってきているのだろう・・・

「ただいま。」

直にとたとたと音がして彼の妹が姿を現した。その目は何か聞きたいことがあるといった。

「ねえ、兄貴・・・この字、兄貴が書いたの？それにしてもこんな字見たことないし、なんだか女の子が書く様な感じだよ・・・。もしかして、兄貴にも彼女ができたの？」

矛（前書き）

出来ましたら評価お願いします。

矛

二、

それを聞いて少年は妹が手に持っていた置手紙を渡してもらい、自分で再び読んでみることにした。そこには、確かに自分が筆跡が残っていたのだが・・・見る影も無く、消しゴムで消されており、代わりにあの絵本に書かれていた字と全く同じ書き方の字がそこに書かれていた。

少年は、玄関に立ち尽くした。自分の兄貴はどうかしたのかと心配そうに妹が覗き込む。そして、妹が

「あ、あのさあ・・・」

といったところで少年は自分の部屋に駆け上がり、昨日もらった木刀を持って再び部屋を飛び出すと・・・呆氣にとられている妹の隣を走り抜けて夜空に満月輝く外に飛び出していったのであった。

「・・・・あ、兄貴？」

いきなり走り去って外に飛び出してしまった自分の兄を呆然と見ながら妹は口を開いたのであった。

少年は木刀を持って近くの公園まで走ってきた。この公園は病院にも近いので病院患者もたまにこの公園にやってくる。少年も良くこの公園を利用していたものだ。

「・・・・。」

そして、少年は思った。

何で僕は木刀なんかを掴んでこの公園まで走ってきたのだろうかと・・・とりあえず、少年は考えてみた。そして、なんだかこの木刀をもらってしまったのでおかしいことが続いていると思ったのである。つまり、事の発端は木刀であるのでこの木刀を捨ててしまえば何とかなると思ったのであった・・・。

しかし、そう簡単に捨てようとしても、この木刀はあのおじさんの孫の形見である。あの店にこの木刀以外何も売っていなかったのはきつとあのおじさんが守ってきたのだと考えてしまった少年は何度が振った後に捨てることにした。

「一、二、参、四、伍、六、七、八・・・」

木刀を振るのは久しぶりだが・・・かなりうまく振っているような感じがしていた。まるで、振り子のような軽さである。

「・・・へえ、意外と素質があるかもね？」

「・・・どうも。でも・・・あんまりこんな事したこと無いから分からないよ。」

少年は後ろのほうで聞こえた声に答えた。てつきり、何処かの剣道場の美少女でもいたと思ったからだ。しかし、実際は誰も彼の後ろにはいない。いるのは彼を心配して追っかけてきた彼の妹だけである。彼の妹もいきなり兄が喋りだしたので意表を突かれて驚いたのであった。妹が兄に話しかけようとすると・・・。

「全く、君もそろそろ夕飯食べたほうがいいんじゃない？お昼前から眠っていたんだよ？」

と、少年の目の前に青白く光る何かが現れたのであった。少年の妹

はその場でパンツ全開となり、この場に変質者でもいたら彼女を誘拐しようと思ったかもしれない。

そんな妹の反応を知らずに少年はいたって冷静に目の前に現れた少女に木刀を振る手を休めて尋ねた。

「・・・貴女があのおじいさんのお孫さんですか？所謂幽霊？」

「うん、正解。」

白いドレスのような物を着ている少女は宙に浮かんで頷いた。少年はもうちょっとこの少女が浮かんでくれたらパンツが見れると思ったが・・・そんなことはないと思って話を進めることにした。

「・・・それで、僕がこの木刀をあのおじいさんのところに戻してくればあなたは消えるんですね？」

「まあ、理屈上ではそうなるかな・・・けどさ、ちょっと話をしてもいいかな？」

少女はそういうと少年の方にふわりと乗り、上から少年を見据えた。あ、可愛いと少年は思ったが・・・とりあえず頷くことにした。少年はあまり女の子に話しかけられることはないので幽霊といっても女の子だ。それでも構わないと半ば自分の恋愛を放棄しているのである。

「そ、ありがと・・・そうだねえ、まずは何で私がこの木刀にいるか教えてあげようか？」

「どうぞ、勝手に・・・あ、でもそろそろ帰らないと・・・妹が心配してるから・・・。」

「うーん、じゃあさ、君の用事が終わってからでいいよ。私はそれまで木刀の中で眠っているからね・・・何かあったら起こしてちょうだいな。」

そういつてあっさりと少女は木刀の中に引っ込んで消えてしまったのであった。少年は今まで自分が本当の幽霊と話していたことに半ば馬鹿らしく思ったが・・・とりあえず家に帰って晩御飯でも食べようと考えていた。しかし・・・世の中というものはそう簡単にできているわけではない。

「きゃあああ！！！」

後ろからそんな叫び声が聞こえ・・・少年は驚いて木刀片手に振り返った。

ここからはちょうど林が邪魔をしていて良く見ることはできない。ただ、街頭に照らされて辛うじて見えるのは少年が通っている高校の女子の制服の一端が視界の端から消えそうなのであった・・・少年はあたりを見渡したが・・・頼りになりそうな警察官なんて都合のいいものは転がっていなかった。他に助けを求めるものもおらず、携帯電話も持ってきていない。あるのは手に持っている木刀だけであった。

「畜生！」

少年はその木刀を持って走り出していた。相手が刃物を持っているたらどうしようと考えていると足が震えだし、齒はがちがちと鳴り出しそうであったが・・・頼れる相手が一人もない状態では頼れるのはこの木刀だけであった。

住宅街の路地裏。もとからこの町は都会といったところは少ない

のであまり人はいない。そこに少年の妹がロープで縛り上げられていた。何かの薬を嗅がされたのか幸せそうに眠っている。口からは涎を垂らしている。

辺りには数人の若者たちがその少女を囲んでいた。一人の若者が仲間たちと話し始める。

誘拐されたのが自分の妹だと少年は気付いておらず、とりあえず走ってきた少年は木刀に向かって話しかけた。事情を知らない人が見たら危ない少年だと思うに違いない。

「・・・ごめん、ちよつと起きてくれないかな？」

「ふぁ？おや、あれからあんまり経ってないけど・・・もう自由時間になったのかな？」

少年は事情を幽霊に自分が聞いた叫び声を聞かせた。そして、どうするべきかと幽霊に聞いたのであった。

「そうだねえ、とりあえず・・・男としては助けるのが一番だと思うよ？だけどね、後先考えないのはいけないなあ。」

「じゃ、じゃあ・・・見捨てたほうがいいのか？」

幽霊は何を言っているんだ、この馬鹿チンは・・・とでも言いたげな顔になった。

「・・・助けるべきだよ。君には男の勲章がないのかな？まあ、それに私もついてるから大丈夫！！」

ついてる↓憑いてる。とりあえず少年は頷いておいた。そして、助けるとしてもここから見える位置では数人いることが確認できる。

「とりあえず、相手に顔を見られないように何か持つてない？ 頭からそれをかぶっておけば大丈夫。この木刀はねえ……まあ、そんなことより、紀州が一番だよ。隙を突いて奴らを慌てさせるんだ。慌てているうちに誘拐されたという女の子を助ける、次にとりあえず抱えてどこかにその女の子を置いて、襲う！！じゃ、なくて……追っかけてきた相手をばこばこにすれば万事オーケー！」

長くて少年にはちよつと複雑であつたが……少年は頷いて友達からもらったショ。カーの覆面を着けたのであつた。事情を知らない他人が見たら警察を呼ぶだろう……。

「おい、そろそろ迎えの車が来るぜ？」

「ああ、今回は簡単に誘拐できたな……。」

「そうだな。」

そんな話をしている数人のもとに黒い誰かが現れた。

数人は犯行現場を見られたと思い込み、びびつた。一瞬の隙を突いて少年は彼らの中心に縄で縛られていた少女を抱えて走って逃げたのであつた。数十秒、何が起こつたのかよくわからなかつた若者たちだが……獲物を横取りされたのに気がつき、走って逃げたしまった相手を慌てて追いかけ始めたのであつた……。

辺りが真つ暗なので自分が抱えている女の子の顔を見ることができなかつた少年は少々残念に思つたが……とりあえず無事だけを確認して交番の近くにその女の子を置くことにした。少年とこの交

番に勤務している人は昔からの馴染みがあるので何時に見回りに出るかを知っていた。

「さ、逃げるかこれからやってくる相手を迎撃するか決めようか？」

「・・・逃げたいけど・・・もうちょっと時間を稼いだほうがいいかも・・・もう少しかかると思うんだ。」

既に少年が見る方向からは何人かの足音が聞こえる。

「・・・そう？じゃあ、木刀を持っているだけこっちが有利だからね・・・振り回してたら勝てるんじゃない？」

幽霊は軽く言い放った。その顔には余裕の笑みがこぼれている。そんな表情を見ると少年は不安な気持ちが少々、和らぐのを感じた。和菓子を食べた後に渋茶を飲んだような感じがしたのであった・・・。

「・・・さ、頑張つてね？」

「う、うん・・・。」

少年は頷いて木刀を握り締めた。そして、集中して暗闇のほうを見やる・・・。

「・・・成る程、やっぱり私を完璧に見ることができてるってことはもしか・・・。」

幽霊はそういったが、少年はそんなことを聞いておらず集中していた。なおも、解説めいた幽霊の独り言は続く・・・。

「・・・さて、この少年の力がどのくらいのもなのか・・・計らせてもらおうかな？まあ、見ているのも面倒だから・・・久しぶりに無理やり力を解放させてもらおう。」

幽霊はそういつと黒かった瞳を蒼色に染めた。瞬間、少年は意識を宇宙ぐらいに吹っ飛ばせ、前に倒れるような感覚を覚えた。

「・・・さて、『満月の騎士』の力を見せてやろうじゃない。」

幽霊の声で呟く少年の目は何処までも澄んでおり、此処より遙か遠くの月のように光って見えた。そして、数分後・・・その場に数人の若者が倒れていた。

盾

三、

少年はぼーっとしながらも目を覚ました。その後、幽霊が彼を起こし、事情を説明した。なんとも、適当な説明をされた。

「ええつとね、君の体をちよつと借りたよ。うん、意外といいねえ．．．癖になりそうだよ。まあ、合格つてところかな？とりあえず、あの連中の四肢は当分使い物にはならないようにぼつこぼこにしておいたから．．．」

少年はこの暴力的な話を聞いて少し顔を青く染めたが．．．おなかが減っていたので一旦、家に帰ることにした。家ではきつと妹が怒っているに違いなかった。

「．．．お兄ちゃんも大変だねえ？」

「君には兄弟いなかったの？」

少年はとぼとぼ歩きながらそう答えた。先程からお腹の中では栄養を求めて何かが蠢いている気がする。少年はそれを治めるためにお腹を擦った。

「そうだねえ、一人、姉がいたかな．．．けど、私が死んだ後はどうなったか知らないや。」

「そ、そう？聞いて御免。」

そんな少年を見てふふつと笑った。そんな無防備な笑顔に少年は

相手が幽霊だということを忘れて見入っていた。

「・・・あ、名前を言うのを忘れたけどさ、私の名前は満月^{まつき}って言うんだ。間違ってもまんげつつて呼ばないようにね？君は？」

少年は幽霊に鼻っ面を指差されてちよつと驚いた。

「・・・僕？僕の名前は天道時 時雨。」

「ふうん、時雨ねえ・・・なんだか、弱そうな名前だね？」

この名前を小ばかにされるのは良くあることだったのでなれていた少年はちよつと苦笑した。その顔に気がついた幽霊は悪びれた感じで礼を述べた。

「あ、御免・・・。」

「いいよ、慣れてるから・・・まあ、そんなことより早く帰らないと妹に怒られちゃうからね・・・。」

そういつて少年は走り出した。幽霊もそれに続く。家はもう既に少年から見えるぐらいに近くなっている。夜空には満月が光り輝いていた。

「そついえばさあ、時雨の妹の名前は？」

「・・・ん？僕の妹の名前？柳^{やなぎ}鈴^{すず}。まあ、妹みたいなもので本当は親戚なんだけどね・・・。」

少年は走っていたスピードを落とし、幽霊に話し始める。

「・・・僕の両親は多忙な両親でね、そうだな・・・三歳の頃には既に今の家に預けられていたんだ・・・それでね、両親と会うことは今も二年に一回あるかないかでね・・・この前あったのはいつだったかな？まあ、それで一つ年下の従妹がその家に住んでてね、いろいろあつて懐いちゃたんだよ。まあ、それで兄貴になつて欲しいってある日言われて・・・今のような状態になつたんだ。」

幽霊はその話を始めのほうは真面目に聞いていたが・・・後半部分からは面白くなさそうに聞いていた。

「ふうん、あんまり他人に話すようなことじゃないねえ。そんなことをアキバで話してきなよ・・・囲まれて襲われるよ。」

「え・・・あ、忠告ありがとう・・・。」

少年がそういってお礼を述べたので幽霊は溜息をついて呟いた。

「・・・天然か？ちよつと憑く相手間違えたかな？」

「何か言つた？」

少年はそう言つたが、幽霊は首を振つた。

家の中には明かりは点いているが人はいないといった不思議なこ
とになっていた。当然だ・・・彼の妹は警察に今頃保護されてい
るであろつ。

「・・・おや、誰もいないねえ？」

「そうだね、どこかに行ったのかな？」

少年は右手に木刀を持ってとりあえず家の中を探してみた。しかし、人がいそうな気配は全くない。鼠がいそうな雰囲気はあるのだが……。

「あ、この前友達とどこかに行くって言っていたのが今日かもしれないなあ。」

少年はそんなことを唐突に思い出してそういった。のんびりしたような感じでそう言ったのであつさと幽霊はそれに賛成した。

「へえ、デートかな？けど……普通電気を点けたまま行くもんかねえ？」

「僕が直に帰ってくるって思ったんじゃない？」

「ああ、成る程……。」

賛成二票、反対零票でそのまま話は花を咲かせる。

「まあ、結構もてるからねえ……お兄ちゃんとしても鼻が高いよ。」

「そ、全く、妹馬鹿なお兄ちゃんだ事……。」

そんな会話を続けており、少年は一人で夕飯を食べ始めた。幽霊は隣の部屋でテレビを見ながらけらけらと笑っている。

そんな時、電話が鳴った。

「……おい、電話だよ？彼女から？」

「……僕に彼女はいないよ。きつと、おばさんか鈴からだよ。」

少年はそういつて立ち上がり、電話を取った。

「はい、もしもし……。あ、鈴？え、迎えに来て欲しい？あゝ成る程、お出かけは終わったのか……。うん、分かったよ。」

少年はそういつて受話器を置き、幽霊に告げた。

「妹から迎えの催促がきたからちよつと行ってくるね？」

「あゝはいはい、気をつけて行つてらっしゃい。先程の連中に会つたら迷わず逃げるんだよお？」

そういつて幽霊は笑い番組を見てそこいらを転げまわり始めた。電気は点けたままにしておいて少年は家を出たのであった。

少年が妹を迎えに行つたところは警察署近くの郵便局であった。

「お待たせ。」

少年がそういつて妹に告げると、妹は目に涙をためて彼に抱きついたのであった。

「兄貴い！！」

事情が分からない少年は戸惑つたが……。どうにか妹を落ち着かせるために何か一発芸をやらうと考えたが……。特に思い浮かべることが出来なかつたので諦めた。とりあえず、事情を聞くことに

した。

「・・・鈴、どうしたの？」

「・・・・・・・・。」

少年は尋ねたが妹は黙ったままであった。少年はそこまで力が強くないのでそろそろ妹を支えるのもきつい。

「・・・鈴？」

「すう・・・・・・・・。」

どうやら、眠ってしまったようだ。少年は感じ、妹をおんぶして帰ることにした。自転車を持ってくるべきだったなあと思ったが二人乗りはいけないうたので諦めたのが良かったのかもしれない。

「・・・・・・・・。」

おんぶしている妹は昔よりも当然重くなっており、家につくころには少年は息も切れ切れ、足腰はがたがたである。鍛えることをお勧めしたい。

「はあ、はあ、はあ。」

妹の部屋まで送り届け、少年は幽霊がいる部屋まで戻っていった。

「おつかれさん、どうだい、なんか変な人物に会わなかった？」

「いや、会わなかったよ。」

幽霊の隣に腰を下ろして息を整えた。そんな少年を眺めて幽霊はため息をついた。

「で、妹の彼氏には会えたかい？」

「いや、あえなかったよ。妹にあった瞬間、抱きつかれたよ。」

幽霊は意味ありげな表情をして答えた。

「そりゃあれだ、きつと彼氏に振られたんだよ。可哀想にねえ。」

「成る程、それは鈴が振られたショックで寝てしまったのか……こういうときはどうすればいいのかな？」

幽霊はちよつと考えた後、答えた。

「放つて置いた方が絶対いいと思うよ。蒸し返すのはいいことじゃないからね。」

因みに、幽霊が生前誰かと付き合っていたことはない。

「へえ、そうなんだ……。」

少年は素直に感心し、それならそうしておこうということで放っておく事にした。テレビを見ながら幽霊は更にアドバイスを送る。

「きつと、誰かに甘えたかったんだよ。今頃、自分の部屋で泣いていると思うからね……出てきたときは優しくしてあげないといけないよ?。」

「わかったよ。」

アドバースをもらい、少年は幽霊に礼を述べた。そして少年はそろそろ風呂に入ることにして・・・未だに自分が覆面を被っていることによやく気がついた。幽霊もよやく気がついたらしく、二人して乾いた笑いを出したのであった。

次の日の朝刊、そんな少年の写真が新聞に不審者として張られていたのは言うまでもない。

槍

四、

それから数日後、少年の叔母は体調を回復していた。おばについても、少年と十歳も歳は離れていない。

まあ、その後も特に何もなく、少年は未だに木刀を自室においていたのであった。そして、夜な夜な話しかけているのである。何故なら、朝は高校にいつているので話していない。幽霊は幽霊で少年が家に出た後にようやく行動を開始するのである。しかし、大半は暇なので寝ている。その日の夜も少年と幽霊は話をしていた。

「・・・成る程、やっぱり類は友を呼ぶのか？」

少年は自分の友達のことを話していると、幽霊はその話を詳しく聞いていた。そして、納得したような返事をしていたのであった。

「まあ、小さいところからの友達だからねえ。」

しみじみとそんな話をしていると、誰かが部屋をノックするような音がした。幽霊はすばやく姿を消し、少年は扉を叩いた主に返事をした。

「はい、どうぞ？」

「・・・兄貴、誰か来てるの？」

扉を開けて入ってきたのは少年の妹であった。そんな妹の顔は何かを疑っていきそうな顔であった。

「いや、誰も来てないけど？」

少年は嘘をつくでもなく、普通に答えた。そんな答えに妹は満足してないのか更にたずねる。

「・・・女の人の声が聞こえたよ？」

少年はううむと唸った。ここで少し解説しておくが、幽霊は少年にとあることを守って欲しいといていた。自分の存在は黙っていて欲しいということであつた。幽霊の癖して、姿を消していない間は誰からでも見る事ができ、声も聞くことが出来る。

少年が不思議に思つて何故、そんなことを頼むかと聞くと、

「それはね、私のことが噂になつたらモテモテになっちゃうからよ。」

それを聞いた少年は妙に納得し、それ以降、その約束を守るといつたのであつた。

「ええと・・・そう、電話してたんだよ。うん、ちょっと友達とね。」

少年は嘘をつくとき瞬きの回数がいつもより1・5倍となり、目を逸らす。そして、顔には冷や汗が玉のように浮かび、体全体で嘘をついていますというような状態に陥る。

「・・・ふうん、兄貴つて彼女いたんだ？」

「いや、彼女なんていないよ。僕みたいな取り柄のない男を誰が好きになるって言うんだい？」

そういつて少年は妹を部屋からさっさと追い出して木刀に振り返ってため息をついた。

「はあ、危なかった……ばれるところだったよ……。」

「……全く、あれじゃあ、嘘ついてますって言ってるようなもんだと思うんだけどな。」

幽霊はそういつてため息をつき、空に浮かんでいる月を眺めて少年と再び話し出した。

そして、数分たって少年がトイレに行った瞬間、妹が部屋に入ってきた。

勿論、自分の兄が嘘を言っているか、本当のことを言っているかを見極めにきたのである。

そんな妹の様子を木刀の中から眺めている幽霊は息を潜めて見入っていた。妹はクローゼットの中に侵入し、扉を閉めた。中からは隙間があるので外の様子を見ることが出来る。妹が小さいころ、自分の母親から怒られたときに良く、このクローゼットに隠れ、兄が母親をなだめてから出て行くのが日課となっていた。

少年はトイレを済ませて自分の部屋に入って再び幽霊と話そうかと思ったが、幽霊の姿が見えないので先に寝たのかと思って自分もベッドの中に入った。勿論、既に歯磨き等は既に終えている。

部屋が暗くなり、安らかな寝息が規則的に聞こえてきたのを聞いて、妹はクローゼットの外に出ようとしたが……いざ出ようとすると、タイミングよく少年が音を発するので出ることが出来なかった。そして、そんな妹が入っているクローゼットの扉を誰かが開けたのであった。

「……鈴ちゃんだっけ？」

「……え？」

妹の前に立つた幽霊は白く発光しており、よく言えば蛍、悪く言えば切れかけの電球のようであった。妹はそんな幻想的な相手を前にして目を丸くした。

「……ほら、今のうちに部屋に戻りなよ。君のお兄さんは寝てるからさ。」

「あ……そうですか……ありがとうございます。」

何かなんだか分からなかったが、妹は黙って自分の兄の部屋を退出した。幽霊はそんな妹を後ろから眺めて苦笑した。

次の日、少年はいつものように起きて朝食を食べに階下に降りたのだが、そこには久しぶりに見る自分の母親が立っていた。

「……あ、母さんおはようございます。」

「ええ、おはよう時雨。ほら、荷物まとめなさい。貴方にはこの家を出てもらっわ。」

バリバリのスーツ姿で少年の母親はそう言った。こんな感じでもいつもやってきて厳格な性格であった。ちなみに、少年はそんな母親の言いつけをこれまでずっと守ってきたのであった。

「……わかりました。それで、今度の僕の住まいはどこですか？」

「時雨の為にアパートを借りたわ。……それがいいものよ。さ、二人にもきちんとかんがえておきなさい。六時半にはこの家を出なさい。」

いね。」

今日は休日で朝からおばも妹も寝ている。

こんな朝早くにこの家でおきているのは少年だけだ。

因みに、幽霊は低血圧だといっていたので行動を開始するのはかなり後である。

少年は寝ている二人を起こすのはいけないと思ったので置手紙を書いて手荷物だけを持って家を出たのであった。手荷物といってもこの前手にいれた木刀と学校の道具だけである。少年としては最低限の荷物しかいつも持っていないのでいつでも家を出る準備は整っている。小さいころからいつでも家を出る準備をしなさいといわれており、その厳格ぶりは少年の夢の中まででて来るほどであった。

「じゃ、お母さんは仕事があるから。」

「はい、いつてらっしゃい。」

きっかり六時半に今まで住み慣れていた家の前で別れの挨拶をする。少年は今度会うのはいつだろうかと思いつながら母親から新しい住処の地図をもらったのであった。

少年は最低限の荷物を持って地図を片手に三十分ほど放浪してようやく、新しい家を発見したのであった。

そこは、幽霊が出てきてもおかしくない洋館であった。

「・・・・。」

何かを察知したのか木刀が蒼く光り、幽霊が姿を現した。その目は驚きに満ちている。

「・・・時雨、何でこんな朝早くに家の外に私を連れて出るの？」

「・・・ここが今日から僕の家だって・・・。」

少年はため息をついて洋館の門を音を立てずに開けて進入を開始。直後、いきなり自分の携帯が鳴り出したのでその場に飛び上がった。

「・・・なんだ、母さんからのメールか・・・。」

少年は携帯電話の画面を覗き込んでいる幽霊とともにメール内容を確認した。

『時雨へ、私の妹が貴方の事で病院に行ったと聞きました。私としては貴方に早く独り立ちをさせたいと思うので絶好の機会と思い、新しい家へ引越しさせることにしました。人に迷惑を掛けるのはいけないことだということが分かっていないというのが私の見解です。』

その内容を見て少年と幽霊はそろってため息をついた。

「・・・凄い母親だね。まるで、おばさんが倒れたのがお前の所為だつて言ってるみたいだよ。」

「いや、そう言ってるんだ。まだ、小さいころのことを根に持つてるんじゃないのかなあ・・・。」

幽霊は首を振って少年を凝視したが、少年は溜息一つを返答にさつさと洋館の中に入っていったのであった。

同時刻、携帯電話が鳴ったのに気がついたおばはメール内容を見て固まった。

内容はほとんど、少年のものと変わっておらず、慌てて少年の部屋に入った。

折りたたみ式の机は姿を消し、布団は綺麗に畳まれて・・・クロ―ゼットの中は空っぽであった。布団の上には手紙がおかれており、おばさんへと鈴へとそれぞれ分かれて置かれていた。おばは自分宛の置手紙を眺め、溜息をついたのであった。よほど時間がなかったのだろうか・・・もとから汚い字はほとんどおばに読むことは出来なかった。因みに、少年が書いた手紙の内容は次のようになっていた。

『おばさんへ、どうやら僕は母さんの考えによって他の家に引っ越すことになったようです。先程、朝起きたら母さんがいて、そのようなことを言っていました。今まで、お世話になりました。それでは、失礼します。』

おばは少年の妹に告げるかどうか迷っていたが・・・起きてきた妹が階下で読んでいるのが聞こえ、とりあえず階下に向かったのであった。

一方、洋館の中に入った少年はとりあえず人が住めるということを確認すると、一番近い部屋に入ってそこを自分の部屋にすることにした。そして、木刀を両手で掴んで何か化け物がいなか確認しに奥へと向かったのであった。

「・・・時雨、足が震えてる？」

「だ、だって・・・夢で化け物が出てきたんだよ。」

そんな話をしながら洋館の中を午前中を使って歩いたが・・・少年が危惧するような頭が三つある犬などは出てこなかった。全く

無意味だと思っただが、仲の内装をある程度確認することが出来た。そして、地下へと続く階段と屋根裏部屋に続く階段を見つけた。そこだけは確認するのはやめたほうがいいのではないかと幽霊が言ったので確認するのをやめておいた。

「・・・あ、そろそろ昼食にしようかな。」

「そういえば昼食をとるのも忘れてたねえ。」

一応、幽霊も食べ物を食べることが出来るようで・・・好きな食べ物は何だそうだった。

「・・・そういえば、食材もないな。それに・・・僕は料理できなかった。」

これはかなりつらい独身生活が始まりそうだと少年は苦笑したのであった。

斧

五、

幽霊は出口に一番近い部屋のベッドでごろごろしており、少年は先程買ってきた料理の本を片手に折りたたみ式の机で勉強していたのであった。

「・・・時雨、昼食まだ？」

「・・・うん、どうかな・・・目玉焼きぐらいなら大丈夫だと思うけど、一応、引越し記念に何か豪華な食べ物を食べたいんだよね・・・」

そういいながらも少年は料理の本をその場に置いて立ち上がり、チリひとつないキッチンに向かった。幽霊もその後を追いかけた。

「悪いけど、卵を割ってくれないかな？」

「わかった。」

幽霊は幽霊なのに卵を掴み、片手で起用に卵を綺麗に割った。その技術に対抗意識を持ったのか少年が片手割に挑戦したが、あっさりと失敗し、幽霊に笑われただけであつた。その後、買ってきた食材を使つてとても遅い昼食をとったのであつた。昼食中、黙っているのが嫌いな幽霊は少年に色々と自分が気がついたことを話したのであつた。

「・・・ここさあ、どうやら誰かが先にやってきて清掃したみたいだね。かなりの使い手だよ。」

「・・・掃除のフロ？」

「うん、それにさ・・・時雨が必要だと思っているものだけを置いてるみたいだし・・・誰かに見られている気がするんだ。」

出口に一番近い部屋には机、ベッド、箆笥が置かれていたのであった。他の部屋には家具などは見受けられない。そして、きちんとお風呂も少々大きなものが洋館の中には存在していた。以前、誰かがお風呂を使ったとは思えないぐらいの綺麗さである。

「洋館にお風呂をつけるのっておかしくない？」

「・・・確かに・・・」

「つまり、前々から時雨をこの洋館に住まわそうとしていたんじゃないかな？」

そこまで幽霊は話したが、少年はどうでもよさそうに言った。

「ま、しょうがないよ。僕の所為でおばさんが倒れたのは事実だし・・・。」

「時雨は一人暮らしいいの？」

「今は君も入れて二人だからね。何かが出てもどうにかなるだろうし・・・。」

前向きな考え（他力本願）を聞いて幽霊は溜息をついた。その後は洋館の庭を綺麗にする仕事を二人で行ったのであった。庭を綺麗

にしていると、母親からメールが来た。

『引越し先を決しておばさんと鈴ちゃんに言っではいけません。余計な心配を掛けるといけませんからね。貴方の身の回りは渡辺さんに頼んでいます。』

幽霊はそのメールを見て聞いた。

「渡辺さんって誰？」

「確か・・・母さんのところにいる執事さんではなかったっけ？」

携帯電話を閉じようとすると、（元）自宅から電話が鳴った。少年は通話ボタンを押して普通に会話し始めた。

「・・・もしもし？」

『もしもしじゃないよ。兄貴！』

電話の相手は妹であった。その声は震えている。少年はあわてて何があったのかを聞いた。

「そんなに慌ててどうかしたの？まさか、またおばさんが倒れたとか？救急車呼んだ？」

「違うよ！何で勝手に引越ししちゃうの？」

少年はそれを聞いて安心し、後者の質問には何気なく答えた。

「ああ、母さんが二人に迷惑掛けないように引っ越せだって。だか

ら引越したんだよ。」

幽霊は既に庭を綺麗にする仕事を再開しており、誰かが掃除し終わっていた庭を逆に汚くしているように見えた。それを横目で確認しながら少年は電話の相手に告げた。

「・・・ま、なんかなるよ。じゃあ、僕はちよつと破壊活動を行っている友人を止めに行くからね？体に気をつけるんだよ？」

そういつて切ろうとしたが、妹はそれを許さなかった。

「・・・兄貴、住所教えてよ。」

「え？・・・母さんが駄目だつて言っているから無理だよ。」

妹は何かを言おうとしたが、少年の携帯電話は電池が切れてしまった。

「・・・そろそろバッテリーを換えてもらつたほうがいいのかもしいないな。」

何にも使うことが出来なくなった携帯電話をポケットに入れて庭を破壊しているようにしか見えない行動を停止させるべく、少年はホールを持って暴れまくっている幽霊のもとに走っていった。

一方的に会話を打ち切られてしまった妹は悔し涙をいっばいためで自分の母親に住所を聞くことが出来なかったと告げた。

「・・・そう、困つたものね。」

お婆のほうも何度も自分の姉に電話を掛けているのだが・・・忙しいのか全く相手にされていなかった。お婆の姉・・・つまり少年の母親は既に日本にいなかった。

「・・・どうしよう・・・。」

「あ、姉さんなら手を回すの早いからきつと学校に住所変更を告げるはずだわ。」

お婆はそういうと、電話を片手に電話帳を取り出して電話をし始めたが・・・教えてはくれなかった。なんでも、個人情報を守るためだとか、彼の母親が絶対に誰かに教えたりしないで欲しいといっているからだそうだ。裏でお金が一生懸命働いているかもしれない。

「・・・駄目？」

「うん。駄目みたいね・・・こうなったら直接高校にいつていき、どこかに拉致して聞き出すしかないみたい・・・。」

何気に過激なことを言うお婆だ。少々、気が動転しているのかもしれない。

そのころ少年は友達の家で宴会を開いていた。友人の家の祖先は酒で巨万の富を築いたらしく・・・未成年が飲んではいけないお酒がたくさんあった。家にはお手伝いさんが何人かおり、そんな方々が少年を友達の部屋に案内したのであった。幽霊は家でお留守番をしている。

「しかしまあ、君も大変だねえ。もとはこっちの地域に住んでたわけじゃないんだろ？」

「うん、そうだね．．中学はもつとあっちのほうだったんだけどね．．僕の母さんが家の事情でここにしろっていったね。そのときもおばさんたちに迷惑を掛けたんだ。友達もこっちに来てから作るのは大変だったなあ。」

少年の目の前でジューズを飲んでいるのは霜崎 賢治。少年が一番初めに仲良くなった友達である。好きなものは冗談、嫌いなものはお説教である。

「まあ、がんばんなよ。あ、そろそろ帰ったほうがいいんじゃないかな？」

「そうだね、そろそろ帰らせてもらうよ。」

窓の外は既に暗くなっており、いい年した女の子にとっては危険な時間帯だろう。もっとも、男が痴漢に襲われるとは思えないが．．。

少年は千鳥足（友達が冗談でジューズだと偽って飲ませた。）で洋館に向かっていった。少年の家系は全て酒に弱く、ちよつとの量でも足取りふらふら、何を言っているか分からない．．などなど、お酒が駄目な体質なのだ。少年も電柱に謝ったり、丸くなっている猫の尻に浣腸してひっかかれたりした。

「あ、トイレに行きたくなったなあ．．．ちょうどいいや、公園でしてこよう。」

少年は何時ぞやの公園のトイレに入り、出てくると．．．

「．．．触るでない！」

と、不良たちに絡まれている女の子の前を通った。酒が回っている少年は不良の一人の足を思いっきり踏んづけて家に帰ろうとしていたが、あっさりと掴まれた。

「てめえ、人を踏んづけてしれつとかえろうとしてんじゃねえよ。」

普段はここで謝るだろう・・・事実、踏んで行ったのは確かに少年だが・・・今日の少年はいろいろと不満でもたまっていたのはいきなりそういつてきた相手を一撃で倒したのであった。その光景を見て周りの不良たちが憤る。

「・・・お前、何やってんだよ？」

「うるっさいな！大体、女の子をこんな大勢で囲んで何しようって言うんですか？まあまったく、いつつもいつつも・・・もてないからって襲っちゃ駄目でしょうが？ほら、皆様・・・警察行きましょう。」

そんな酔っ払いに不良たちは襲い掛かったが・・・相手にされず、少年にばこばこにされたうえ・・・

「あ、ここで寝ていると寒いでしょうから、こっちに寝かせておきますねえ。」

そういつてトイレの個室に七人ぐらい押し込んだのであった。そして、少年もとうとう力尽き・・・

「まあまったく、母さんにも困ったもんだ・・・ふにゃあ。」

と、最後の言葉を口にして砂場に倒れこんだのであった。

「お、おい！大丈夫か？」

ドレスを着た少女に話しかけられたが既に少年は静かな寝息を立てて寝入ってしまった。因みに、少年はそのとき、母親に怒られている夢を見たのであった。塩をまかれたナメクジのようになっていたと語っている。

そして、次の日・・・

少年は自分が何処かのベッドで寝ているのに気がついた。ああ、自分は引越しをしたんだと思ったのだが、こんな部屋ではなかったと思っていると、部屋の扉が開いて見知らぬ誰かが入ってきたのを確認した。眉をひそめて相手の顔をまじまじと眺め始めたのであった。

斧（後書き）

どなたか評価してくれると嬉しいです。

刀

六、

少年はベッドから降りて相手を見入った。

「あの、どちらさまでしょうか？」

「ああ、私の名前はリベナ・トロワド。先日、こっちに引っ越してきたものよ。」

「ああ、そうですか。」

そこで会話は終了。少年は改めて相手を見て頭の内部で認識を開始した。金髪でスタイルぐつと、顔ぐつと。性格はお嬢様みたいな感じであつたが……一番気になることは違っていた。

「あの、どうして僕はここで寝ているんでしょうか？」

「そなたは私を助けてくれたのよ。名前はなんていうのかしら？」

「あ、天道時 時雨っていいです。」

少年はそういつて昨日のことを思い出そうとしたが……友達の家に行ったことしか思い出すことは出来ない。

「あ、そろそろ……お邪魔になりそうだから失礼しますね。」

「そ、そう？私の恩人なんだからもう少しいても構わないのよ？」

幽霊のことも気になるのでさつさと御暇させてもらうことにした。

「ええつとですね、また会う機会もあると思いますから・・・それでは失礼させてもらいますね。」

少年はそういつて屋敷の外に出た。そして、最後に走りながら告げた。

「まあ、もう会う機会もないと思いますけどね。」

そして気がつく。

この家が自分の新しい家とかなり近いことを・・・あの少女は未だにこつちを窓から見ており、家に入っていくのを簡単に確認することが出来そうだったので少年はわざと家と反対側の方向に向かつて歩き出した。因みに、そちらには今まで少年が住んでいた家があり、妹の庭のようなものでもある地域である。

案の定、少年の姿を見つけた妹は音も立てずに背後に忍び込んだ。そして、尾行を開始。そんなことに全く気がつく様子もない少年は洋館の道に歩きだした。

成る程、こつちの方のいえかぁ・・・と妹は思いながら少年の家に行き着くことに成功したのであった。

「ただいま。」

少年が一人で住んでいるはずの洋館のほうを見て妹は驚愕した。何故なら、洋館の扉の前には白いドレスを着た美少女が少年を待っていたからだ。妹視点で見ると新婚さんのような感じがしている。

「あわわわわ・・・。」

妹はそんな声を出して白いドレスを着ている少女を指差し、震えた。あの時も妹の前に姿を現したのだが、じつくりと話す機会もなかった。その後、妹的に色々と考えてみたのだが、頭の中では少女の彼女ということになっている。白いドレスの少女は妹に向かって微笑んだ。幽霊にしてみれば妹のことを知っていたので軽い挨拶のつもりだったが・・・妹はそれを

「どうも、貴方のお兄様の非の打ち所のない可愛い女の子です。」

といているように思え、彼女がいなかった少年に聞きたかった。しかし、悲しいと思うほうの気持ちのほうが力が強かった（圧倒的な力により、聞きたいと願っている願望はあつという間に大敗した。

「・・・兄貴の・・・嘔吐きい!!」

背後から少年にドロップキックを食らわせて妹は走り出した。どこに行けばいいのかわからなかったのとおりあえず公園のほうに走り出したのであった。

「・・・え、え? ねえ、満月さん、今僕は誰に蹴られたの?」

「時雨、今すぐ妹さんに謝ってあげないといけないよ。詳しい話は時雨の妹がすると思うから・・・ほら、公園のほうに走っていったからね。」

全身から?オーラを出している少年の肩を掴んで幽霊は後ろを向かせて背中を押したのであった。

少年は幽霊に教えてもらったほうに駆け出したのであった。しかし、誰かさんは少年を軽々しく公園に行かせたくなかったのかもしれな

い。少年がマンホールの上を走ろうとするとえげつない何かが飛び出して少年を捕縛しようとしたり・・マンションの一室から吹き矢が飛んできたり・・誰かに隠し撮りされている感じに襲われたのであった。

少年が公園に着いたときには既に夕方になっており、飲まず食わずの少年は車に轢かれて潰され、更にさんと降り注ぐ太陽のせいで干からびてしまった蛙のようになっていた。

夕焼けの空をバックに妹は頭を垂れてブランコに一人で乗っていた。砂場では砂のお城をバックに二人の少年が死闘を繰り広げていた。

妹はいきなり少年の背後からドロップキックをお見舞いしたことを少し悪く思っていたが、嘘をついた少年のほうが許せなかった。もしも、自分が兄貴の立場だったらスリーカウントをとられるまで無防備でいてもいいと思っていたのであった。

「・・・鈴・・・」

少年は頭を垂れてブランコに座っている妹に話しかけた。少年としては隣のブランコに座りたかったが、先客の少女がいたのでかしてまで座ろうと思わなかった。妹は少年の呼びかけに応え、顔を上げたが・・・まるで、阿修羅のような顔であった。

「・・・何か用、嘔吐き？」

「いや、何が何なのか僕にも分からないんだけど・・・。それに、何で怒っているの？」

少年を見据える妹。少年は阿修羅様な妹を見ることが出来ず、顔をそらした。そんな少年の態度に更に頭をヒートさせて、妹は尋ねた。

「・・・兄貴に彼女がないよね？」

「何度言ったら分かるんだい？何も取り柄のない僕に彼女がいるわけないだろうに・・・」

「だったら・・・あの、美少女は何？」

美少女といわれ少年は今日の朝に会った女の子（既に名前は忘れている。）を想像したが・・・見られた覚えがないのでその考えを消すと同時に・・・その少女のことを忘れてしまったのであった。

「・・・美少女？僕の知り合いにはいないけどなあ・・・」

「兄貴の洋館の前にいた白いドレスを着た女の子よ！」

それを言われて少年は納得した。

未だに少年は妹の顔を見ていない。怖いのだ。そしてそれは正しい行動であった。近くにいた少女は既に逃げ出しており、妹の体から噴出したオーラによつて砂場で戦っていた二人の少年は息を潜めて少年と妹のやり取りを見守っている。その近くにブランコから避難してきた少女はそれを怯えた表情で見ている。

「ああ、成る程・・・満月さんの事が・・・。鈴、幽霊だよ、その人は・・・。」

当然のように鈴は納得しなかった。

「幽霊？ふん、また嘘ついてるんでしょ？」

「嘘なんてついてないよ！」

少年は先程より怖くなった顔の妹を直視できず、襲われたときのためにいつでもバックステップできる準備をしていた。

「・・・だつて、嘘ついてないときの兄貴は私の目をちゃんと見るもん！それに、嘘ついてても素直に認めてごめんって言うてくれたもん！それに・・・それに・・・私が泣いてたときは泣き止むまで優しく慰めて・・・くれたもん！！」

水を差すようで悪いが最後の少年の行動は小学三年生が最後だ。それ以降、妹は泣いたことがない。

泣き始めてしまった妹を見てしまった少年は辺りから『あんたが悪いのなら、さっさとどこにかしろ』といった感じの視線を浴びてどうしようと考えていた。妹としては自分を優しく抱きしめて『嘘だよ、鈴。』なんてことを言ってもらいたいのだが、少年としては公共の場でそのようなことをするのは他人の迷惑になるだろうと考えていた。しかし、全く泣き止まない妹に覚悟を決めた。

「鈴、ちょっとブランコからどいてくれないかな？」

「・・・。」

少年の言ったことに素直に応じた妹は泣きながら立ち上がった。そんな妹を抱きしめて少年は言った。辺りからはこれでいざこざは解消するのかといった疑惑の視線が少年に注がれている。

「・・・鈴、本当に満月さんは幽霊なんだ。信じられないならしょうがないけどね、満月さんは僕の彼女じゃないよ・・・。それだけは信じて欲しい・・・。」

「兄貴のバカあ！ー！うわああああん。」

少年にしっかりと抱きついた少女は大声を出しながら更に泣き始めたのであった。

「・・・ごめん、鈴。」

自分より頭一つ分小さい妹の頭に顎を乗せて少年は言った。辺りからは安堵の溜息が漏れている。

妹が全体重を少年にかけると・・・あっさりと少年は後ろに倒れ、頭を打って気絶した。

「あ、兄貴？」

動かなくなった少年を揺すってみたが・・・起きることはなかった。たんこぶが出来ているので妹はとりあえず洋館まで少年を運ぶことにしたのであった。

「・・・おかえり。」

「・・・こんにちは。」

洋館の前には例のごとく幽霊が立っていた。

「・・・私は貴女に負けません。」

「・・・勘違いしてると思うけど・・・ま、そんなことより時雨をベツドに連れて行ったほうがいいと思うけど?。」

ズリズリと引きずりながら二人で少年を運んでいったのであった。少年の顔は下を向いていたので擦り傷きり傷などがたくさんあった。傷は男の勲章らしいが……。目も当てられない状況になっている。ベッドに載せたのはいいが……。誰も少年の顔を治療しようとは思っておらず……。色々と話し合っていた。

「私もここにすみませう！」

「ふうん、いいんじゃない？私の住んでいる家だけど……。ま、時雨なら許してくれるんじゃない？」

こうして、少年が寝ているうちに話し合いは進んでいくのであった。

弓

七、

とある屋敷・・・少年が住んでいる家よりも数倍でかい大きさである。

「・・・奥様、私が坊ちやまのところに行かなくてはいけないのでありませんか？」

「いいわ、あの子のところには他の人が行くからね・・・あの子にはさつさと子どもを作ってもらわないといけないのよ。」

そのびつくり発言に執事・・・渡辺さんは片眉を上げた。

「・・・よろしければその理由を教えてくださいと嬉しいのですが・・・」。

「・・・いずれ分かるわ。しかし、あの子の好みが分からないから・・・まずはこの子から行ってみようかしら？」

そういつて少年の母は書類を眺めて言ったのであった。

数日後、少年が庭で幽霊と話していると・・・誰かがやってきた。

「・・・時雨、誰が来たよ？」

「・・・宅配業者かな？」

二人で行ってみることにした。幽霊は時雨の後方四十五度上空に待機している。もしも強盗だったら少年の体をのっとして戦うつもりだからだ。

「・・・失礼ですが・・・天道時　時雨様というのは貴方でしょうか？」

門の前に立っていたのはメイドさんであった。

「・・・・・・・・。」

驚いて声も出せない少年と対照的に幽霊が答えた。

「そうです。間違ってますが・・・貴女は誰ですか？」

「メイドです。」

「見れば分かります。名前を聞いてるんですよ。」

幽霊に言われてメイドははっとした顔になってすいませんといった。

「メイドの美奈です。時雨様の母上様からここに行けと言われました。」

幽霊は物珍しそうに下から上までじろじろと眺めた後、ぼさっとしている時雨の体に乗っ取ってメイドの胸を触った。

「きゃ。」

『まあ、メイドの癖してあんまり胸ない気がするんだけどなあ・・・。
普通メイドはボンキュボンじゃない？』

勝手なことを言っつて少年の体から出てくる幽霊。少年は未だにメイドの胸に手を置いている。掴んだままだったの思い出して急いで少年は手を引っ込めた。

「・・・ま、まあ・・・どうぞ上がってください。あまり掃除してないから汚いかもしれないんですが・・・。」

そついうとメイドは急いで洋館の中に入ると掃除を始めた。それを遠くから見ている少年と幽霊はその手際のよさにびっくりしていた。

「・・・凄いな。」

「そうだねえ。ま、メイドだからいいんじゃない？時雨、そろそろ外に干してる洗濯物を入れたほうがいいんじゃない？」

掃除をしているメイドを放っておいていいものか悩んだが雨が降りそうだったので洗濯物を入れることにした。

それから一時間後、部活に入っている妹が帰宅。

「兄貴、この人誰？」

メイドを見るなり小声で少年に聞いてくる。

「メイドの美奈さん。」

少年はそういつてメイドの手伝いをしていた。

「時雨様はいいですよ。ほら、座っててください。」

「いいよ、手伝ったほうが早く終わるからね。」

そういつて少年と幽霊はメイドの手伝いをしているのであった。
一人、暇な妹はそんなアットホームな雰囲気には耐えられないのか少年に引付く。

「兄貴、遊んでよ。」

「・・・いつまでも子どもじゃないんだから、たまには一人で遊ぶ勉強でもしなさい。お勧めは反復横とびかな。それに、鈴はもう高校一年生だよ。」

少年にそういわれて妹はぶつと膨れた。そのまま窓を拭いている少年の背中に飛び乗る。

「こ、こらっ！降りなさい！」

「いいじゃん。」

幽霊はそれをニヤニヤしながら見ている。メイドは既に夕食の準備を始めていた。少年も急いで手伝いに行こうと思っていたのだが妹がそうはさせまいと引付いている。

「時雨、いい妹を持っているねえ。顔がにやけてるよ?。」

「にやけてないよっ！ほら、鈴もさっさと僕の背中から降りなさい

「！」

「嫌嫌嫌嫌！！」

どたばたやっていると思かねた幽霊が少年に助け舟を出した。

「しょうがないなあ。全く、手が甘いつて言うの？」

少年の体を再びのっとり、背中に引っ付いている妹を無理やりはがす。

「ほおら、これでよしっ。」

「助かったよ、満月さん。」

胸を反らしている幽霊に礼を述べて妹のほうを見る。

「鈴、もう鈴は子どもじゃないんだよ？そんなに甘えてたらどうなるか知ってる？」

幽霊と妹、全員を夕食に呼ぶためにやってきたメイドはそれを聞いてブラコンだと思ったのだが・・・少年は真面目な顔になって答えた。

「糖尿病になるんだよ？」

それを聞いた全員は固まった。幽霊はそんな少年に言った。

「この、天然^{ナチュラル}があー！！」

少年は冗談だといった後に舌を出してメイドに近づいた。

「美奈さん、夕食が出来たんですか？」

「え、ええ・・・そうです。出来ました。」

それを聞いて少年は鼻歌を歌いながらその場を去ったのだった・・・残されたのは三人の女の子であった・・・それから十分後・・・全員集まっの夕食が開始された。メイドは少年の近くに立って待機している。

「へえ、おいしいなあ・・・美奈さんは料理がうまいんですね？」

「時雨様、ありがとうございます！まあ、がんばって練習しましたから・・・。」

そんな二人の間にはゆったり感の雰囲気の流れており、それを見て妹はじーっと少年の顔を見ている。幽霊は普通に食事を取っていた。たまにいいいなあといっている。

「・・・兄貴、鼻の下を伸ばさないでよ。」

「伸ばしてないよ？ただ、でれっとしてるだけだよ。」

なんともしまりのない顔で妹に返事をする少年。にへらという音が聞こえてきそうである。

「・・・まあ、メイドなんて一般市民に普通はつかないからねえ。時雨がだらけるのもしょうがないでしょ。」

幽霊は冷静に分析しながら味噌汁を口に運ぶ。

「・・・ふん、兄貴のスケベ。」

妹はそういつてそっぽを向いた。黒々としたオーラが湧き出ている。怒った妹を幽霊はなだめようとしている。

「まあまあ、こんな経験なんてそうないんだからさ・・・時雨も珍しいと思っっているんだよ。ね、時雨？」

少年は殺気からでれでれしているだけで話を聞いていない。それを見て幽霊は溜息をつき、妹は激怒した。

「兄貴っ！！」

その呼びかけにはっとして少年は正気に戻った。

「危ない危ない、こんな経験なんて初めてだからつい・・・ところで美奈さん、執事の渡辺さんが来るんじゃないかなかったですか？」

「・・・ええ、私もそのように聞いていたのですが・・・急に奥様・・・時雨様のお母様が私のところにわざわざ来て時雨様のもとに行けとおっしゃったのです。」

それを聞いて少年は真剣な顔になって考え始めた。それを見て妹は何かを疑っている。

「・・・満月さん、真剣な顔しているんですけど・・・何かたくらんでませんか？」

「いや、大丈夫だと思うよ？時雨はああ見えて真剣なときは真剣だからね・・・ま、私より貴女の方が分かっているって思うけどね・・・」

少年は何かを決意したように携帯電話を取り出して何処かに電話を掛けた。

「あ、母さん？ええ、今、近くに立っています・・・え？な、何を言ってるんですか！！え・・・ちょ・・・そんなの分かりませんよ？自分で何とかしろ？はあ、何言ってるんですか！！切らないでくださいっ！！」

弓（後書き）

どなたか、乾燥いただけるとうれしいです。まだ、はじめのほうなので応援してくださいと非常にうれしいです。というより、この小説、面白いでしょうか……。自分では面白いところもあると思うのですが……。自画自賛ですかねえ。

矢

八、

携帯電話をポケットの中に入れ、母親はコーヒーを飲んでいた。

「・・・お坊ちゃまからですか？」

「ええ、珍しく怒ってたわ。全く、もう子どもじゃないのに・・・まあ、気に入っているみたいだから放っておけば大丈夫でしょ・・・。渡辺、何かあったら直に報告お願いね。」

「かしこまりました。」

「はあ、早く孫の顔が見たいわ・・・。」

一方、電話の相手がさっさと切ってしまったので少年は携帯電話を睨みつけていた。

「・・・美奈さん、ちょっと話があるから来てください。」

その顔はどこことなく、怖い。そのままお化け屋敷にバイトに行くことをお勧めしたい。

「え・・・わかりました。」

メイドは頷いて少年の後を追いかけていき・・・妹と幽霊もその後が続こうとしたが・・・少年がついてこないで欲しいといったのでついていけないことにした。因みに、それに納得したのは幽霊だけで、妹は無理やりついていこうとして幽霊に抑えられた。

「ま、そんなに重要な話じゃないかもよ？それか、夕飯がまずかったとか？」

「どうせ、エッチなことでもしようって魂胆じゃない？兄貴はぜったいにそう出るー！」

二人で適当なことを言い合う。しかし、ちよつとばかり真剣な話である。

少年の部屋に入った二人は片方はベッドに腰掛け、もう片方はその近くに立っているだけであった。前者が少年で後者がメイドである。メイドの顔は少々、引きつっており、少年は切羽詰ったような顔であった。

「・・・美奈さん、母さんから何か聞いてませんか？」

「・・・いえ、何も聞いておりません。」

そういったメイドの目を見て少年は溜息をついた。嘘をついているのは明確である。目はきよろきよろ、顔が真っ赤になっており・・・がたがた震えている。これでは自分から嘘ついてますといっているようなものだと思っただけだ。まあ、彼も人のことを言える立場ではないのだが・・・。

「・・・母さんに電話したらね、とりあえず僕の好みを知るために美奈さんを僕のところに行くよう仕向けたんだってさ・・・本人の意思でこういうものは決めるべきだと思うんだけど・・・美奈さん、嫌になっただけなら帰っていいよ。」

「・・・わかりました、嫌になっただけなら帰ります。それまで、いてもい

いんですね？」

メイドは床の辺りを見ながら何かを考えているようであったが・
・急に何かを決心したような感じになった。

「時雨様、貴方は私がいた屋敷では非常に有名でした。奥様はそんな時雨様に会社を継いでもらいたかったのでしょうか……。」

少年が中学最後の頃であった……少年のもとに一通の手紙がやってきた。

それには何かの券が同封しており、内容は私のもとに帰ってきて会社を継ぎなさいと書かれていたものであった。しかし、少年はそれを捨てた。少年としては今までお世話になってきた『家族』に何一つの恩返しをしておらず、そのまま母親のもとに帰れば間違いなく恩をあだで返すことになるからであった。

「……まあ、それはいいとして……美奈さん、これからよろしくお願いしますよ？」

「ええ、任せて置いてください！私が出来るとは何でもして見せますから……。」

その頃、妹と幽霊はぼさあつとテレビを眺めていた。明日の天気予報が表示されている。

「……あゝあ、槍でも降ればいいのになあ。」

「……何言ってるの？降るなら矢でしょ。」

そんなどうでもいい会話をしているとメイドと少年が帰ってきた。

それを見て幽霊は少年の耳元で言った。

「時雨、そろそろ何かが始まりそうな感じだね・・・ある程度、登場人物も増えたし・・・ま、それはいいとして、用事はもうすんだのかい？」

「え、う、うん・・・終わったけど・・・どうかしたの？」

いやと首を振って幽霊は少年の周りを優雅に？回った。

「あ、そういえばみんな美奈さんにあいさつをきちんとしてなかったような・・・。美奈さん、この人・・・じゃなかった、幽霊はね、満月さんっていうんだ。それで、隣の女の子は鈴って言うんだ。」

自己紹介といえない自己紹介はおわった。美奈さんはにこりと笑ってそれぞれに挨拶をし、挨拶された二人も一応、返した。

「・・・私、もう疲れた。」

妹はそういつて姿を消した。

「・・・時雨様、鈴様は怒っているように見えましたが・・・どうかされたのでしょうか？」

メイドは不思議そうに首を傾げながら少年に尋ねた。しかし、少年も首をかしげて首を振った。

「いや、どうにもしてないんじゃないかな・・・。」

それを聞いて幽霊は呆れたような溜息をつき、メイドの耳元で何

かを話した。それに納得がいったのかメイドは成る程というような顔になり、少年に言った。

「恐れ入りますが・・・どうやら時雨様が鈴様にそっけなさ過ぎるのが原因だと思われます。満月様から聞きましたところ、血はつながつていないそうですが・・・お二人は兄妹だそうですね。たまにはお話をされたほうがいいのではないのでしょうか？」

「そうだねえ、私もそう思うよ。近頃、二人でゆっくり話しもしないんだろう？鈴が言ってたよ。兄貴はいつも部屋にこもって何かと話してたってね。」

二人にそういわれ、少年は頷いた。

少年としては目の前にいるメイドともっと話したかったのだが・・・言っていることも事実なので妹のところに向かった。因みに、妹の部屋は少年の隣であり、一応、鍵が掛けられるようになっていて、少年は扉を開けて妹の部屋に入った。妹はベッドの上のっぺお入ってきた少年を少し眺めた後言った。

「・・・ノックもせずに普通、女の子の部屋に入ってくる？」

きつと妹に睨まれ、少年はそのまま後ずさって扉を閉めた。そして、今度はノックをして入る。

「・・・何しにきたの？」

「鈴と話に来たんだよ。」

少年はそう告げて妹の隣に座った。その動作に何かを期待するように妹は聞いた。

「・・・実は私を襲いに来たとか？」

「はい、君は何を言ってるのかなあ？・・・ま、それはいいとして、鈴は家に帰ったほうがいいんじゃない？いつまでもさ、こんなところにいたらおばさんに迷惑を掛けるんじゃないか？」

少年は心底心配しているような感じで妹に告げた。

「・・・大丈夫、連絡しておいたしさ・・・。」

そういった後、妹は顔を真っ赤にして少年に聞いた。

「・・・兄貴、私のこと嫌い？」

少年はそう聞いてきた妹の顔を見た。穴が開くほど見つめ、見つめられたほうの妹は顔を真っ赤にしていた。

「・・・いや、別に嫌いじゃないよ。」

「じゃ、じゃあ・・・好き？」

「うん、好きだよ。」

妹はそれが兄妹としての好きでも嬉しかった。もっと、詳しく知りたかった為、更に質問した。

「どんなところが好き？」

「そうだねえ、優しいところと、小さいところに気がつくところか

な。」

「じゃあさ、何処が嫌い？」

妹はどこからか手帳を出して色々書き込んでいた。その目は既に真剣そのものとなっている。

「・・・嫌いなところは特にないな。」

その少年の答えに妹はほつとしていた。妹は少しばかり戸惑いながらも少年の肩に頭を乗せた。

「・・・鈴？」

「・・・妹ってさ、甘えてもいいよね？」

「・・・うん、いいんじゃない？」

そんな二人を影から・・・正確に言うとな天井から見下ろしている幽霊とメイド。幽霊は分かるとして、メイドはまるで忍者のようにその光景を見ていた。

「まあ、これでいいでしょう。」

「そうだねえ。ま、兄妹仲良くやってもらわないとね・・・私の兄弟たちはろくな連中がいなかったからねえ。」

幽霊は首を振ってやれやれといった感じで首を引っ込めた。それに習ってメイドも首を引っ込める。多分、この二人が手を組んだら何でも出来るに違いない。

「・・・・・・・・。」

「鈴？」

少年と妹はそのままの体勢であった。妹は安心したのか知らないが・・・・そのまま寝入ってしまった。少年は妹を起こさないように努力しながら自分の部屋に戻ったのだが・・・・幽霊にはやし立てられたのでさつさと寝ることにした。その夜、少年は幸せな夢を見ることが出来たらしい・・・・。

拳

九、

「・・・ふう、久しぶりじゃから戸惑ったわ。やれやれ、歳はとりたくないのお。」

朝一番にとある老人がタクシーで少年たちが住んでいる町にやってきた。タクシートの運転手に大金を預け、釣りは要らないといって老人はそのタクシーを見送った。そして、少年が住んでいる洋館の前へと足を進ませたのだが・・・

「・・・ま、ちょっと様子でも見せてもらおうかの。ばれたらばれたじゃ。」

時同じくしてとある町の上空、そこには大きなヘリが飛んでいたのであった。

少年は大きな木の下にいた。向こうからは誰かが走ってきている。誰なのかはわからない。

「・・・お待たせ、時雨君。」

「いや、僕も来たところだよ。ところで、用事って何？」

「・・・実はね、私は時雨君のことが大好きなの!!」

そう言われて、少年は目を覚ました。

「・・・なんだ、夢か。・・・僕も悲しい人間だな。ま、取り柄のないってことは分かってるんだけど。」

今日も一日が始まる。少年は首をぐるぐる回し、ベッドから降りる。それに習って木刀から幽霊が姿を現す。

「へえ、もう起きてたなんて珍しいね。」

「ま、たまには早く起きるさ。さ、学校に行くんだろう？今日は何かがおきそうだからねえ。」

少年はそんな幽霊の顔が普段より輝いているように見えた。それを見て少年は夢の内容を思い出す。ああ、僕にも春が来ればいいのになあと思いながら少年は着替えを始める。

「・・・痣が増えたね。」

「そうかな？ま、いいんじゃない？」

少年の体をまじまじと眺めて幽霊は言った。近頃、少年は幽霊を相手に練習をしていた。幽霊いわく、努力をしない男はもてないそうだ。その言葉に見事に引っかけり、少年は幽霊にぼこぼこにされる毎日である。

着替え終わって直にドアが開いてメイドが入ってきた。

「あ、既に起きてましたか・・・。朝食が出来てますよ。」

「ありがとうございます。満月さん、行きましょう。」

幽霊は頷いて宙に浮いて時雨の後ろをついていき始めた。

「美奈、時雨の体はちょっとばかり鍛えられてきただろう?」

「ええ、細身ですけど意外とついてますね。しまっていていいですね。・・・あ。」

メイドは幽霊にはめられたのを悟った。幽霊はにやりと笑って去っていった。去り際、幽霊は言った。

「ふ、覗いているのを気取られてしまうなんてね。おぬしもまだまだよのう。」

そして、一人硬直しているメイドを残して少年の後を追って行った。

「行つてらっしゃいませ、お二人方。」

「「行つてきます。」」

幽霊も少年に引っ付いて（因みに、肩に乗っている。）学校についていくこととなった。しかし、そんな彼らの本日の登校はさまざまな罨が仕掛けられているのである・・・。

最初に、異変に気がついたのは少年であつた。

「・・・?」

「どうかしたの、兄貴?」

「いや、誰かに見られてる気がしない? ほら、あのおばさん達さあ、なんかこつち見てない?」

一見すると立ち話をしているおばさんたちのようだが……片方がなんとなく人形のような気がするである。

「……確かに時雨のいつている通りなんだけどね……時雨、もうちょっと近くで見えたら？私と鈴ちゃんはここで待つてるからさ。」

そういわれて少年は怪しまれないように自然体でそのおばさんたち近付いてみた。

「……ふ、わしもまだまだじゃな。」

おばさんの一人が言つと、急に、少年の姿は消えた。

「ちょ、えええええ。兄貴が一年お笑い芸人のようになつさり消えちゃったあ！」

「いや、落ち着いて、鈴ちゃん。」

幽霊はそういつて妹を落ち着かせた。そして、再び口を開く。

「……よく見たらあのおばさんたち消えてるわ。」

「……わああああ！！兄貴がああ！！」

二人が騒いでいる頃……少年たちが通っている高校の屋上に消えた人たちは存在していた。

「……あれ？何で僕はこんなところにいるんだ？」

「それはのう、わしが連れてきたからじゃ。」

少年は声がしたほうに首を回した。そこには、かなり久しぶりにあう人物がお汁粉を一気飲みしていた。

「あ、やまかわ山海おばあ様。どうかしたんですか？」

少年は急いでその場に立ってあたふたとしながらいつもあったときのように接していた。それを見て彼の祖母はため息をついた。

「……はあ、全く普通にしてくれて構わんといっておるのに……」

彼女としては少年には普通にしてもらいたかったのだが……彼の母親がいつも祖母に対しては頭が上がらなかったのもそれを見た少年（当時五歳。）はそれ以降、母親以上に祖母に対してかなり硬い態度をとるようになったのであった。

「まあ、それはいいとして……時雨、彼女は出来たか？」

「い、いえ……すいません。出来てません。」

少年は背筋をびしっとして答えた。その顔は真っ赤に染まっている。

「人に自慢できるものなんてとくにありませんし……まあ、近頃は勉強をやっているところなんです……。」

しかし、そんな少年を見て祖母は頭を下げた。

「すまん、それはわしのせいじゃ。」

「お、おばあ様！頭を上げてください。そんなことしないでください！！」

少年があたふたしながらもどうかして祖母の頭を上げさせようとする。しかし、一向に頭を上げる様子もなく、少年は困りきっていた。

「・・・おばあ様、どうか頭を上げてください。そうしないと僕は母さんに怒られてしまいます。」

そういわれてようやく祖母は頭を上げた。

「・・・時雨、少々つまらん話をするが黙って話を聞いてくれ。・・・これはな、十五年前のことじゃ。ナレーター、準備はいいな？」

ええ、準備オーケーです。さて、それでは少々、昔話をするかう・・・。

昔々、あるところにとっても金持ちの一族がいました。

ある日、その一族にも後継者が誕生しました。

男の子で、未来を約束されたようなお坊ちゃまでしたが・・・とある日、その地方に飾られていた代々のご神体とお人形遊びをして遊んでしまったのです。

そのご神体には噂があり、彼女がいないものがそのご神体に触れてしまったら普通の女の子と付き合うことが二度とないと語り継がれておりました。

その人形にはお面がついており、なんでも、過去にお面をずっとか

ぶっていた女の子が人知れず泣いて人形となってしまったそうです。それで、お人形と遊んでしまった男の子を自分の彼氏にするとわれているそうです。

まあ、それも運命だと思ったのでしょうか……とりあえず様子を見ることにしました。しかし、それが効果覲面……少年が女の子に近付くと、必ず、不幸がやってきました。ご神体を保存していたところに入れたのは祖母であり、彼女はとても自分を責めておりました。まあ、そんなこんなで今に至ります。少年の年齢〓彼女いない暦となっておりますので、はい。

「……そ、そんな過去が……。」

その昔話を聞いて少年は驚愕していた。まあ、顔はどちらかというと美系といってもいいのだが、そういう理由で少年は彼女が出来ないのである。

「……その神様の名前は面様といわれているのじゃ……。しかし、時雨は普通にあの二人の女の子と接しておったし……。おかしいのう……。時雨、わしは詳しく調べてみるから……。出来るだけ早く彼女を見つけろよ？」

「わ、わかりました。」

そういつて祖母は少年に手を振ってフェンスを軽く飛び越して姿を消した……。

「いや、ちょ、まった！！今、フェンスを飛び越したって言わなかった？」

知らない。いつてないし、それに物語すすめよおつ。

少年の頭上にはへりが飛んでおり、青空が開けていた。何にも悩みのなさそうな風が吹き・・・そんな中、誰かの声が聞こえてきた。

「時雨！！おじいちゃんは悲しかったぞお！！」

少年はあたりを見渡した。しかし、どこにも彼の祖父はいない。しかし、更に声は聞こえてくる。

「さあて、時雨、おじいちゃんが華麗に着地を決めて見せるぞお！！」

ひゅーーんと音がして、屋上に何かがすたつと着地した。

「お、おじいちゃん。」

「いやあ、おおきくなったなあ、時雨。おじいちゃんがお前に会いに来たぞ？さあて、昔話をしてやろう。」

さあて、良い子の皆、今度は昔話からだあ！！

蹴

十、

昔々、あるところに天道時 時雨という弱冠三歳の少年がいました。ある日、少年は彼のおばあさんと一緒に住んでいる家の近くにある神社の中に入りましたとき。

祖母は少年をその場に残して掃除道具を取りに行きました。少年は暇だったので辺りを色々物色し、何か面白いものがないか探していました。そこへ、少年の祖父がやってきました。

「時雨や、何を探しているのかね？」

「えーっとね、ここはかなり珍しい場所だつて聞いたから何か面白いものがないか探してるんだよ。おじいちゃん、何か知らない？」

祖父はうんうんと頷いてから言いました。

「この子はもしかしたらトレジャーハンターになるかもしれん。時雨や、実はここには神様が祭つてあるんだよ。ほら、あの中にあるからな。」

祖父はそういつてその場を去りました。何故なら、外から誰かに呼ばれたからです。少年は神様が祭つてあるといわれたところの扉を開けました。

そこには、西洋の人形が狐のお面をつけて座つてこつちを見ていました。

少年はその人形に近付いていき、お面をはずしてみようと思いま

したが・・・はずすことが出来ませんでした。不思議に思いながらも少年はそのお人形に話しかけました。

「・・・君は誰？」

「・・・。」

まあ、人形だったので喋りませんでした。いつの間にか扉は閉まっており、部屋の中が暗くなっているような感じがしましたが・・・少年はそのままそこでお人形と遊んでいました。少年はまだ、知りませんでした。そのお人形のお面が外れたらどうなるかを・・・。

祖父の昔話を聞いて少年は背筋がぞつとしていた。

「・・・それ、本当？」

「本当本当。なあに、ばあさんから聞いたと思うが、彼女が出来なくなるだけじゃ。そのこと自体には問題はない。」

少年はけらけら笑う祖父を眺めてため息をついた。そして、質問してみた。

「おじいちゃん、もしも・・・そのお面が外れたらどうなるの？」

「そうじゃなあ、何か面白いことが起きるんじゃないか？なんせ、誰がはずそうとしてもそのお面はかわらんからのう。しかし、噂ではたまに変わるらしいのじゃよ。」

ちっとも真剣そうな顔になっていない祖父を見て少年はため息を

ついた。そして、そろそろ学校が始まる時間帯だと気づく。

「時雨、最後に言っておくがな・・・あの後、お前さんとあるところに来て行ったのじゃ。そこではな、お前にもきちんと恋ができるような処置をしてもらった。なあに、大丈夫。元気を出して行つて来い！」

がはははと笑いながら祖父は姿を消した。例により、フェンスを軽々と飛び越え、何処かに消えてしまったのである。

「・・・なんだかなあ。」

少年は屋上の扉を開けて校内へと戻り、階段を下りた。しかし、少年の前に広がるのはエンドレスに広がっている廊下であった。その廊下には人つ子一人、いない。

「・・・ああ、成る程・・・だから二人ともフェンスを飛び越えたのか!!」

少年は何か変な納得をして、血相を変えて屋上に逃げ出そうとしたのだが・・・振り向いたほうもいつの間にかエンドレス・廊下であった。さて、打つ手のなくなつた少年に残された一つの手段、それは助けを求めることだけであった。

「助けてえ!!廊下で遭難した!!」

しかし、声は響くのだが・・・助けてくれる人間が一人もいないので意味がない。まあ、そんな彼を助けてくれそうな幽霊はいつの間にか天井から姿を現した。

「やあ、時雨・・・こんなところにいたのか。」

「ま、満月さん！！助けに来てくれたんですね？」

「いいや、私も迷子。時雨の匂いをたどっていったら・・・。」

「貴女は犬ですか！！」

「こんなところについちゃった！！」

片手で拳骨を作って自分の頭を叩いた幽霊は言った。その頭からは寝癖のような髪の毛が立っている。

「・・・時雨、なんだかここ、変じゃないか？」

「見れば誰でもわかりますよ。」

「私はてつきり時雨の高校は世界一の廊下の長さを持つ高校だと思つたのだが・・・ほら、あれ。」

幽霊が長いひらひらスカートをひらひらさせながら廊下の奥のほうを指差した。そこには、なにやら真つ黒な人型の化け物らしきものがこつちによつて来ている。身長が変わったりしており、あつちの景色が見えているので水分の割合が結構多いのかもしれない。まさに、透けるような肌である。

「・・・ついでに言うと、ほら、窓の外・・・。」

青空だったはずの外の景色は真つ黒になっており、満月が蒼く輝いているように見えた。そして、何かが空を飛んでいる。UFOっ

ぽい。

「・・・ここ、何処？学校？」

「さあ？私は学校だと思うけど・・・。それより、何とかしないとやばいんじゃない？」

先程の軟体生物たちは少年たちに着実に近付いていた。スピード的には遅い。

少年と幽霊は反対側の廊下へと逃避行を始めた。

「時雨、なんだか追っ手に追われている恋人みたいだね？」

「満月さん、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」

少年の肩に乗って囁いている幽霊は何処か楽しそうであった。少年の顔は真っ青だ。

「なんか方法はないんですか！」

幽霊は少しばかり唸ってぽんと手のひらを叩いた。

「時雨、次のうちから選んでね？一、白旗を掲げる。二、窓から飛び降りる。最後・・・。」

「最後？何です？」

「抵抗してみる！！！」

幽霊はそういつてどこからか木刀を出した。それは、家において

あるはずの木刀であつた。

「な、何故に？」

「ほら、いくよっ！！」

少年に無理やり木刀を握らせ……少年は前に進んでいる足をとめた。

「さ、時雨……『満月の騎士』の力を見せてあげようよ。」

立ち止まった少年の右肩で幽霊は言った。少年は頷きながらも連載当初からの疑問を口に出す。

「……満月さん、なんで騎士なのに木刀なんですか？」

「生きて帰ってきたら教えてあげるよ。時雨、ガンバ！！」

幽霊はにこりと微笑んで少年の後ろを押した。幽霊なのにいろいろできるのは不思議だ。てか、幽霊は既に幽霊じゃないだろうに……。

「こうなったらやけじゃー！！」

少年は木刀を左手に持つて（言い忘れていたが少年は左利きである）なきながら人型軟体生物の群れに突っ込んでいった。やってきた少年に人型軟体生物たちは襲い掛かるが……どれも少年になぎ払われて霧散した。少年のはるか後方、幽霊は茶色の眼鏡を取り出してそれをはめて眺めていた。

「ははは、最高のショーだとは思わんかね？」

誰に問いかけるでもなく、そういつて少年の巧みな剣技（実際はただ振り回しているだけ。）にうむうむと首を縦に動かしていた。

「うむ、やはり素質があるな・・・。」

「ぎゃー、こんな軟体生物と遊んでいたらトラウマになりそー！」

少年が最後の一体を切り裂くと・・・そこには黒いフリフリのドレスを着た西洋人形が座っていた。ただ・・・おかしいところは申のお面をかぶっているところである。

「・・・・・・・・。」

その人形は音も立てずに姿を消した。

「・・・・にやるほど、あれが近頃噂のゴスロリ衣装か・・・私もたまにはあんなの着てみようかな・・・。」

幽霊はフリフリの真っ白のドレスをつかんでみた。

「そんなことより、あれ、何か知ってるんですか？」

祖母と祖父から聞いた昔話を思い出して少年は少しばかり、震えていた。何故なら、自分の将来の奥さんがあれかもしれないからである。

「ま、気にしない気にしない・・・ほら、そろそろ・・・力が抜けて立っていらなくなるよ？私がきちんと力を貸してなかったか

らねえ・・・。」

言われたとおり、少年はその場にしりもちをついた。

「・・・平和な世界は何処に消えたんだろう・・・。」

少年はいつの間にか屋上に戻っており、近くには幽霊が座ってそれを眺めていた。

「さあね、でも・・・面白いことがあってよかったね、時雨。」

鎖

十一、

少年は幽霊がいるのを気取られないように教室へと入った。

ここで説明しておくが・・・少年の教室だけはかなり惨い。何故なら・・・少年以外の高校生はすべて不良なのだ。今日も数人しかいない。因みに、放課後まできちんと教室にいるのは少年だけである。何でも、近隣の不良中学生が全てこの高校に受かってしまい・・・その全員が進級した結果、何を間違えたのか少年だけがこの教室の住人となってしまったのだ。

「・・・。」

少年はかばんの中に押し込んだ幽霊を気にしながら静かに自分の席について先生が来るのを待った。そろそろ、チャイムが鳴る時間なのだが・・・一人、茶髪の男子生徒が立って教室を出て行った。もう、戻ってこないだろう。

「はぁ、凄いなえ。」

幽霊はかばんから顔だけを出して誰にも気が付かれないようにこの教室の感想を漏らした。まあ、誰が見てもそう思うに違いない。残り、少年を含めて三名。

チャイムが鳴り、先生が入ってきた。

「・・・おい、そこのお前！何だ、その頭は！」

「ぶぁぁ？俺の魂にけちつけんじゃねえよ。」

「先生に対してなんて失礼な態度なんだ！ちよつとこい！！」

先生は入ってくるなりその生徒を連れて何処かに消えてしまった。少年はため息をつきながら残った一人の不良を見る・・・と、そこで残った人物が不良ではないことに気がついた。

「・・・？」

少年は始めてみるその後姿をまじまじと眺めた。

なんだか暗いオーラが吹き出ており、暗いイメージしかわいてこない。

ここからでは顔が良く見えないのでクラスの集合写真を見た。

まだ、全員がきちんと学校に来ていたところに取ったものであった。

（噂ではＴＶ局が来ると先生に騙されたらしい。）少年は懐かしみながらもその写真をまじまじと眺めながらあの暗いイメージのあるクラスメートを探す。あの人物なら直に見つけることが出来るはずである。まずは自分の近くを探してみるがなかなか見つからない。

そして、十分後・・・少年は影の薄いその少女を見つけたのであった。少年の近くによくよく見てみたら立っていた。少年はその影の薄さにびっくりしながらもう一度後姿しか見えないクラスメートのほうを見る。この教室では絶滅危惧種となった地毛の黒い髪の毛が目覆っているのでなんだか凄く言葉に形容しがたい何かを放出しているような気がしないでもない。

目が合った。

「・・・あ・・・」

「・・・！（やばっ）」

気恥ずかしさで急いで目を逸らして下を向く。そこには幽霊がきちんと机下に収まっていた。かばんが掛けているので・・・まあ、これならあの暗い少女から見えないだろう。

「お、時雨、浮気かな？」

「浮気って・・・そんなわけないでしょ。僕としてはあんな人初めて知ったよ。・・・おかしいなあ、二年生に進級して他に僕のような人はいないか探してみただけど・・・。居なかったと思うんだ。」

少年が自分以外は全て不良だと気がついたときの絶望感を実際に体験してみないと分からない。既に何人かは警察にお世話になったり、退学している。まるで、何かのサバイバルゲームのようだ。

「・・・成る程、彼女は誰にも気づかれることなく、青春を謳歌していたのか・・・。可愛そうに・・・。」

幽霊はそういつて自分の世界に入ってしまった。目がきらきらして何かをぶつぶつ喋っている。そして、不良を連れて出て行った先生は一時間目が始まるまで帰ってこなかった。

昼休み、幽霊は暇だったのか・・・（実際に幽霊は何もしておらず、やってきて先生の近くを回っていただけであつた。）何処かに行ってしまった。教室に居るのは少年と根暗の少女だけであつた。なんだか教室に居ることができなくなったので少年は弁当を持って何処かに避難しようとしたが・・・ここで根暗少女が口を開いた。

「あ、あの・・・!!」

少年はこつちを向いて声を掛けてきた少女を出来るだけ見ないよ

うに辺りを見回した。少年としては近くに誰か、身代わりになりそうな人が居ないか探してみたのだが・・・当然のように誰も居なかった。少年は首をぎこちなく動かしてその根暗少女に向き合った。

「な、何ですか・・・？」

出来るだけ目を見ないように・・・実際のところはどうかやら伏し目がちになっているので目を合わせることはないのだが・・・少年は背の低い相手の頭を眺めることにしておいた。

「い、一緒にお弁当を食べませんか？」

小さな弁当箱を突き出して少年にそうだったので少年としては首を横に振ることができなかった。

「え、ええ・・・いいですよ、一人で食べるのはちょっと心細かったですから・・・。」

因みに、『一人で』の前には『貴女の居る教室では』が入る。まあ、そんなこんなで少年は机に座りなおして作り笑顔をした。初めて女の子のクラスメートに声を掛けられたのがこんなに暗いのではないんだかお先真っ暗だなあと思いながらも少年はポジティブに考えようと努力してみることにした。

「・・・ありがとうございます。」

目まで覆った髪の毛が揺れ・・・その目が一瞬だけ姿を現した。

「・・・・。」

その嬉しそうな目を見て少年は自分の考えが以下に間違っており、まるで、上のものが下のものを見下しているようなものであることに遺憾を感じた。そして、心の中でこの相手に会見を開いて瞬くフラッシュの中……どうもすみませんでしたと謝ったのであった。二人は黙々と弁当を食べ始めた。どちらも話さないので聞こえてくるのは鳥の囀る声と時折、廊下を歩く生徒の音だけである。どうにも息苦しい雰囲気であった。少年は意を決して、話しかけた。クラスメートの女の子に話しかけるのはこれが初めてである。

「あの、名前を教えてくださいませんか？」

「え……な、名前ですか？」

あたふたするその姿を眺めながらどうやらこの人物は話すのが苦手だと気がついた。

「わ、私の名前はですね、ふふふふ……不和 氷雨といいます。」

「あ、そうですか……。」

その後、やはり会話は進展しなかった。既に両方、弁当を食べ終わっており、立とうにも立てない状態が続いている。根暗少女が名前を告げてから既に五分が過ぎており、少年としても色々と考えていた。

（ええと、ご趣味は何ですか……いや、これはなんだかおかしいな……。じゃ、彼氏は居ますか……居なかったときが可哀想だ。……こうなったら、あたって砕け散れだ！！）

なんだか微妙に間違えながら少年は思いついたことを口に出して

みることにした。

「不和さん！」

「は、はいっ！！」

「今日、遊びに行ってもいいですか？」

少年の考えとしてはまず、友達になる方法はとりあえず近付いてみるということであった。しかし、高校生になって・・・なんとなく友達いらんないんじゃないかと考えながら生活をしていたので少年の高校での知名度はかなり低い。小さい頃は初対面の相手でも勝手に邪魔していたぐらいの厚かましさを持っていた。

「は、はいっ！！いいですよ！」

そして、言った後に少年はしまったと思った。これは男子に対してするものであり、女子にすると相手方の父親から睨まれる可能性が出てくるのである。今となつては後の祭り・・・少年は相手の表情・・・が嬉しそつだったので特に何も言わずに弁当を片付けた後、相手に向かって苦笑いをした。

その様子を、廊下から少年の妹が見ていた。

「くっ、先を越されたあ！！いつの間に・・・。」

「全くだ、僕というものがありながら・・・時雨君にはきつく言っておいてくれ。」

「分かったよ、賢治さん・・・？あれ、いつの間に・・・。」

「なあに、軽いジョークだ。む、そろそろ時間だな。さらばだ、時雨君の妹さん。」

突然やってきてさっさとさっていった謎の少年、賢治。少年の友人の後姿を眺めながら妹は目をぱちくりした。

そして放課後、あの後、動揺していた少年は更に思いついたことを適当に口走ってしまい・・・根暗少女の家に着くまで、彼女と手を繋ぐ羽目になった。

「あ、あはははは・・・。」

もはや、少年には笑うしかなく、世界が明日滅ぶといわれても笑うしかないであろう・・・。だが、それに反比例するように根暗少女は嬉しそうであった。少年はとりあえず、話題を出そうとしてそのことについて質問してみることにした。

「・・・不和さん、もしかしてあんまり人付き合いって得意じゃない？」

「は、はい・・・あんまり他人と話したことがないんです。あ、でも小さいころから家で飼ってる黒猫とは仲良しでした。」

ニコニコしながら話すその横顔はどことなく、暗かった。

「・・・もしかして、死んじゃったとか？」

「・・・はい。それ以降、友達は道端の小石でした。掲示板に書き込んだりしてみたんですが、やっぱり存在が薄いのか無視されてばかりなんです。」

更に、三倍ほど落ち込んで暗くなってしまった根暗少女を元氣付けようとして少年は励ました。

「大丈夫、今日から僕が友達だよ。」

「あ……ありがとうございます!!」

頭を思いっきり下げ、根暗少女はお礼を述べた。そして、頭を上げたときの顔は少し、他人をほっとさせるようだったと少年は語っている。

鎌

十二、

その日の夕食時・・・妹は少年に尋ねた。

「兄貴、彼女居ない？」

「ははっ、何言っただよ・・・小さいころから女の子に縁のなかった僕にいまさら出来るわけないだろう・・・。」

「でも、色々女の子と知り合いになってない？」

妹は右手で人数を数えていたりする。しかし、少年が数えても少ない。

「そうだなあ、鈴、満月さん、美奈さん、今日友達になった不和さんだけだな・・・。」

少年は数えていて悲しくなったのか涙を流していた。因みに、もっと詳しく言うのなら少年の母親、少年の祖母・・・等が入る。

「ま、時雨もなんだか変なのに気に入られるようになってるし・・・。」

幽霊はそういうと味噌汁をずるずるすする。その様子を横目で見ながら時雨は誰かを忘れていたような気がしたのだが・・・気のせいだろうかと思って考えるのをやめた。

「時雨様、お手紙が来てましたよ。」

そういつてメイドは少年のもとにやってきた。少年は礼を言つてそれを受け取る。

「兄貴、誰から？」

差出人不明の手紙を眺めながら少年は首をかしげる。

「さあ？わかんないよ。ちょっと、中でも見てみるかな・・・。」

少年はそういつて中身を眺めた。しかし、中には小さな紙切れが入っているだけであつた。

「・・・。」

「嫌がらせでしょうか？時雨様、燃やしておきましょうか？」

そういつてマッチを持つてくるメイドを押しとどめ・・・もう一度手紙の中を見てみると、今度はきちんと手紙が入っていた。

「あ、入つてたよ。」

「全く、時雨はやつぱり天然だな。」

少年は気にせず手紙の内容を確認しようとする。妹とメイドもそれを何とかしてみようと試みた。

『今日の午後七時十七分、屍公園のブランコにて待つ。』

屍公園とは少年が初めて幽霊の姿を見たところでもある。少年は

さつさと手紙を閉じてその場から姿を消した。何故なら、約束の間まであと、三分だったからである。

「兄貴！どうかしたの！」

「時雨様！お行儀悪いですよ！」

「ごめん、ちょっと行ってくるよ。」

出て行った少年を追いかけて二人もその場を後にした。残ったのは幽霊だけであつたが……その幽霊も

「あの筆跡……まさか、姉さんが……。」

と、意味ありげな独り言を残して姿を消した。

そして、公園に少年はやってきた。空には月が輝いている。と、ブランコに人影があつた。

その人影は少年に気づくと、優雅に立ち上がって近付いてきた。

「……お久しぶりです、天道時さん。」

「え、あ……初めまして……。」

深紅のドレスをまとったお嬢様のような感じの美少女がそこに居た。しかし、少年の挨拶に対して少々、眉を上げる。

「この前もお会いしましたわよ。」

「え、そうですか……？初対面だと思いますけど？」

「……まあ、いいですね。ところで天道時君、少々、面白い世界に連れてってあげますよ……。」

少年が首を傾げている間に、美少女は右腕を天空に突き上げたのであった……。

「……あれ？」

少年が気がつくと、そこはただ、何もない空間であつた。

「驚きました？ここはですね……決闘の間なのですよ。……貴方に怨みはありませんが、貴方が『満月の騎士』であるのなら致し方ありません。」

どこから出したのか知らないが……両腕には投げナイフが握られていた。

「え、えええ！！ちよつとまつたあ！！！」

「待つたなしです！！！」

投げナイフが的確に少年の急所をめがけて飛んできく。そのとき、少年は相手がプロだと気がついたのであつた。そして、自分の短かつた人生を振り返ろうとしたのだが……。

「時雨、そんな程度じゃ……殺されちゃうよ！！！」

そのナイフを木刀で食い止めながら幽霊が現れた。少年は尻餅をついてそれを眺めている。

「ま、満月さん！助けに来てくれたんですか？」

「・・・いや、はつきり言つて犬死しに来たのかも・・・ま、相手が相手だからねえ。時雨、話してあげるって言つたよね、何で私が騎士と名乗っている癖して、木刀に憑いているのか・・・。」

「ええ、この前言つてましたね？何ですか？」

幽霊はそれには答えず、相手を睨みつけている。その横顔は普段の彼女のようにのべーっとしておらず、真剣そのものであった。

「私はね、刀で止めを刺されたんだよ・・・あの女によつてね・・・しかも、成仏できないようにこんなのにいれられちゃったんだ。ま、今はどうでもいいけど・・・とりあえず説明しておくけど、あれは私の姉さんなんだ。」

「え・・・似てないですね？」

「大きなお世話だ。ま、私の対極に位置している存在で・・・『紅陽の姫君』と呼ばれてたんだ。」

「へえ、可憐な名前ですね・・・。」

ぼさあつとしている少年にやれやれといいながら投げナイフの刺さった木刀を幽霊は手渡す。

「・・・姫君といいながら、実力は私より上なんだ。いやあ、生きてた頃は一度も勝てなかったなあ。」

「さ、そろそろおしゃべりはそこまでいいでしょう。天道時さん、覚悟してもらいますよ。」

どこから出したのかさっぱり分からないが姫君とやらは再び、投げナイフを取り出した。

「いくよ、時雨！」

「え、ええ！分かりました！！」

飛んできたナイフを何とか凌いで少年は木刀を振りかざした。幽霊の姿はなく、少年の顔は真剣に染まっている……。

「ぶつちやけ、勝負を挑んでも無駄だ。勝てる確率は時雨に彼女ができるぐらいありえない！逃げ道を探すんだ！！」

「分かりました！！」

時たま飛んでくるナイフを木刀で叩き落すという、卓越した技術で少年と幽霊は逃げ道を探した。

「ほらほら、早く何とかしないと……お団子になりますよ？」

ミニゲームのレベル二と言ったところだろうか……投げナイフの数が倍になった。それでも、少年に憑いた幽霊はそれを全て叩き落す。

「時雨！この亀裂に思いつきり木刀を叩き落して！！」

「分かりました！！」

飛んできたナイフを避けながら・・・何とか少年は言われたとおりにことを進めることに成功した。

そして、何もなかったところには公園が現れていた。

「・・・・・・・・姉さんは逃げた。」

「はあ、たすかったあ……。一体、あの人は何がしたかったんですか？」

その質問に何かを考えようとしている幽霊だったが……。

「さあ？あの人昔から何考えているかよくわからないところがあったからねえ。ちよつと、わかんないな……。」

いつもの幽霊に戻っており、少年は少年でいつものまんまであった。

「とりあえず、相手を倒すように訓練しなくちゃね。せめて、時雨だけでも飛び道具に対処できないと……。」

「無理でしょ！！あんなの出来ませんよ。」

「いや、出来るようにしないと危ない！それに、野球でもボールを打てるようになるぞ！」

「え、本当ですか！」

幽霊にそういわれ、少年は嬉しそうに飛び上がった。因みに、少年は今までヒットも打ったことがないのだ。と、そんな二人を影か

ら見ている人物が居た。

「さて、天道時さんの力を見せてもらったけど……ま、合格つてところかな……。彼の母親にも言われているし……。先が楽しみってところですね。」

鎌（後書き）

さあて、そろそろ話に色々工夫をしていこうかなあと思っている
雨月です。いやあ、いつもならやっている十回記念も出来ずじまい・
・どうしたものでしょうか。作者は気分的に落ち込み加減ですが、
これからもヨロシクお願いしますね？ たまに、感想をいただけると
嬉しいでげす（！？）

爪

十三、

少年と幽霊が家に帰ってくると、玄関には英語のノートを掲げた妹とタオルを持ったメイドが立っていた。

「兄貴！英語教えてよ！」

「時雨様！お風呂に入ってください！」

何故だか、両者は一步も譲らずといった感じで手に持っているものを突き出してくる。その目はなんだからんらんと輝いているように見えた。

「・・・ははっ・・・鈴、その宿題はすぐ終わるのかな？」

「うん、すぐに終わるよ。」

「わかった、それなら先に鈴の宿題を終わらせるよ。美奈さん、ゆくりしててください。」

すくすく退散していくメイドを尻目に（幽霊が慰めている。）

妹は少年の右腕を引っ張りながら自分の部屋に連れて行った。

そして、少年は妹の宿題を見ることになったのだが・・・。

「鈴、ここの和文は『私はワクワクしながらベッドに向かった』じやなくて、『私は早く寝た』だよ。一体、どこでワクワクなんて書いているんだ？」

「え、そうなの・・・私はてつきり・・・その・・・あれかと思つて・・・。」

もじもじしながら答える妹を眺めながら少年は溜息をついた。そして、もういいだろうと思つて妹に告げる。

「鈴、僕はお風呂に入ってくるからね。」

「え！もう？もうちょっと教えてよお！」

出て行くこうとする少年の服を引っ張りながら妹は言った。

「お風呂から出てきたらまたくるからさ・・・それまで、僕が指摘したところをきちんと直しておくんだよ？」

「ちえ、わかったよ。」

渋々といった様子で妹はそれに従つた。

この洋館には後からお風呂が増設されているらしく、結構、広い。しかし、夜中一人ではいるとなにやらおかしい泣き声が聞こえてくる気がする。夜中は誰も入っていない。少年は一人で湯船に浸かっている・・・誰かが入ってきたのに気がついた。

「時雨様、お背中流しましょうか？」

タオルを巻いたメイドが入ってきたので少年は湯船の中でずつこけた。

「みみみ・・・美奈さん！！何してるんですか！」

「何って・・・お勤めです。御主人様のお背中を流すのも仕事のうちなんですよ。」

因みに、少年の母親から言われた仕事は最低限の家事だけである。後は、適当にやっておけといわれただけである。

「あ、成る程・・・じゃ、ないですよ！こっちに来ないで下さい！！」

急いでメイドから離れようとするが・・・あっさりつかまった。

「大丈夫ですよ、小さくても文句を言いません。」

「何のことですか！とりあえず放してくださいよ！！」

少年はとりあえず両腕を振り回すことにしておいた。しかし、思いつき振り回すとメイドのタオルが落ちてしまいそうになっているので危ない。

「・・・やっと大人になりましたね・・・さ、体を洗ってあげます。」

「・・・背中だけじゃなかったんですか？」

メイドはにこりと笑い、少年に告げた。

「背中だけ洗っても面白くありませんよ。隅々まで洗ってあげます。そう、隅々までね・・・。」

「い、いやああああ!!」

風呂場に絶叫がこだましたのであった……。風呂場でいろいろな危なかった時間は終わり、少年は約束どおり、妹の部屋へと戻った。

「お兄ちゃん、やっと来てくれたんだね？」

少年は首を傾げた。何かがおかしいと思ったのであるが……。目の前に居る妹はいつもと変わりが無い。

「さ、早く教えてよ。」

「え……。う、うん……？」

少年は潤んだ瞳を自分に向けてくる妹のもとへと向かった。机の隣に立ち（いつの間にかあった。）ノートを覗き込む。

「ええと、ここはね……。こうやって……」

妹は急に少年に体を引っ付けはじめた。既に風呂に入っていたので未だに体が温かい。

「えーと、それでね……。」

しかし、そんなことにも気づいているのか居ないのか……。少年はさつさと妹に勉強を教えると……。

「鈴、そろそろ寝ることにするよ。じゃ、体につけて寝てね？」

「え・・・ちよつと待つてよ、お兄ちゃん!!」

今度は妹が体を掴む前に出て行ってしまったのであった。残された妹は口を開けたままになっている。

そして、少年は洋館の二階にある大きな部屋にやってきた。そこには、幽霊が一人でテレビを見ていた。

「お、時雨がようやく来たね・・・さ、寝る前にちよつと対策を立てておこうか・・・。」

幽霊はテレビのスイッチを名残惜しそうに消して立ち上がった。

「ところで、一体全体何を対処しようって言うんですか？相手は満月さんのお姉さんでしょ？」

「そ、相手は化け物だけど・・・襲われて勝てないってわけじゃない。簡単なことさ・・・強くなればいいの。」

「・・・そんなんでいいんですか？」

自信満々に頷く幽霊を見て少年は信頼してみることにした。

「さて、まずは・・・時雨の身体にくっ憑いて・・・身体の基本能力を上げようかな・・・。」

そういうと幽霊のようになっさりと消え、時雨の体支配権を手に入れたのであった。悪戯し放題である。

「さ、行こうか・・・。」

まじめな顔した少年が言うと、今度は焦ったような顔になった。

「ど、何処へですか？」

「勿論、姉さんのところだよ。なあに、練習ぐらいなら手伝ってくれるさ。」

ケラケラ笑った後、少年の顔は今度はげんなりとした表情となった。

「大丈夫なんですか？」

「大丈夫、大丈夫。逃げようと思えば逃げれるし……駄目だと思ったら脱出……じゃなかった、私が身を盾にして守るから。」

「い、今……違うこといいませんでした？」

そんなことを一見すると一人で言いながら少年は洋館から何処かに向かったのであった。

公園には、一人の美少女が砂場で何かをやっている。

「……来たわね、天道時君に満月。」

少年はそれには答えず、左腕に握っている木刀を振り上げた。

「挨拶も抜きかしら？ま、いいですけどね……。」

風を撫でる様な手つきで『紅陽の姫君』こと、リベナ・トロワドは投げナイフを飛ばしたのであった……。

「・・・・・・・・。」

それを少年は何かに操れるかのようにすべて避けたのであった。

「へえ、一度戦っただけなのにここまで見切るなんて・・・いい体ですわね。」

そういいながらも姫君はナイフをまるでダーツのように相手に投げる。その数は先ほどより格段に増えていたのであった。しかし、そのナイフもすべてよけてしまう少年。

「・・・そろそろ、物量に限りがきてしまいましたわ。それでは、今宵のダンスレッスンはお開きですわね。ごきげんよう、お二人方。」

最後にお買い得版といった感じで持っている全てのナイフを少年に投げつけると、あっさりと姫君は姿を消してしまった。

「・・・・・・・・。」

右に左に・・・時には木刀で防いだりして、少年は何とかナイフの雨をしのいだのであった。

「はあ・・・はあ・・・。」

さすがに体力の限界が来たのか少年はその場にへたり込んだのであった。その体からはなんだか変な煙が出ている。

「ま、初日はこんなものでしょ。時雨、今度からは気合入れていかないといけないよ。なあに、色々役に立つと思うから・・・ね？ガ

ンバロ？」

笑顔で少年に語りかける幽霊を見て少年は自分の運命はどうなる予定なのだろうと誰かに聞きたくなったが・・・とりあえず、明日に備えてさっさと寝たほうがよさそうだと思ったが、先程の訓練で大量の汗が出ていることに気づき、家に帰って湯船につかることにしたのだが・・・この後も、少年は色々と大変な目にあっただであった。

少年は、その日の夜・・・夢の中でメイドに虐められた夢を見たいらしい。

牙

十四、

「・・・奥様、時雨様に刺客を送り込んだのは本当でしょうか？」

「・・・ええ、それがどうかしたの？」

「宜しければ、何故そんな危険なことをしたのでしょうか、私に教えてください。」

「・・・確かめるためよ。あの子が『西洋狐面』のご加護を受けているかどうかのね・・・。ま、学校にも稀に休むかもしれないって連絡を入れておいたし。」

「しかし・・・。」

「大丈夫、安心なさい。きちんと手は打ってあるから。」

「それを聞いて安心しました。」

「念の為、刺客は二箇所に送っておいたから。」

「・・・。。。」

少年はいつものように高校へとやってきた。だが、今日は校長室へと来るために学校へとやってきたのだ。これも、少年の母親からの命令である。

「はあ、本当に校長先生は了承してくれるのかなあ。」

「ま、大丈夫だって。今度はどうなるか分からないけど……が
んばれば何とかなるよ。」

適当にそんなこと言っている幽霊を眺めて半ば諦めて誰かに助け
を求めようと考えたが……彼の救世主はいそうになかった。

しかし、そんな少年にはもう一人、刺客が近くに存在しているの
であった。その刺客は、廊下の影から少年と幽霊をジーツと見てい
たのであった。

『し、時雨君が女の子と歩いてる！か、彼女かな？でも……透け
て見えてるし……あ、成る程……あれが長老様が言ってた幽霊の
満月さんか……』

他の生徒はそんな根暗少女を怪しそうに眺めていたのであったひ
そひそ話していたりもするが……次の瞬間、その根暗少女は姿を
消したのであった。目撃者の証言によると、まるで幽霊でも見てい
たような気分だったらしい……。

その次の日、少年と幽霊はどっかの山に来ていた。

「さ、新天地にきたし、気合入れていこう！」

「……。」

気合が入っているのは一人だけだった。因みに、少年がここに来
る羽目になった理由は……少年の手元に着た一通の手紙であっ
た。差出人は少年の母親。

『点手毛山に行く事。そして、その寺で精神修行をしてくること。』

「一応、学校長に報告しておくこと。」

と、書かれており・・・少年はその通りに従ったのであった。

「暗いぞ、青少年！」

「・・・いや、だってさぁ・・・おかしくない？」

「何が？」

辺りを見渡しても寺らしきものは見当たらない。あるのはバス停だけである。それ以外は森といっても過言ではない。

「それなら、近くを歩いている人にでも聞いてみたら？ほら、あそこに鎌を持って歩いているお婆さんとか・・・。」

「・・・。」

どこからどう見ても怪しそうな雰囲気を出している老婆である。その姿はまさしく、山姥といっていいに違いない。らんらんと光る両の眼は先程から少年と幽霊を捉えて逃さないようだ。幽霊が言っているようにさりげなく鎌を隠しているような感じがこれまた、恐怖心を増大させている。

「気が進まないなあ。」

「そう？なら私が聞いてくるよ。ちょっと待ってて。」

幽霊はそのまま駆け出して山姥・・・失礼、老婆のもとへ向かったのであった。二、三言葉を交わした後、少年のほうへ幽霊は手

をまねている。これを老婆がしていたら首を振って遠慮していたに違いない。少年が老婆のもとへ行くと、幽霊は老婆のほうをちらりと見て、少年に耳打ちした。

「この人、なんだか普通の人間じゃないみたい……。」

「山姥？」

「いや……景色に溶け込んだりしてるから……。」

そんな話をしていると、老婆はニコニコしながら少年に頭を下げた。

「どうも、私たちは貴方のお母様からご連絡をもらったものです。道中は私が案内いたしますので、どうぞ、ついてきて下さい。」

そういうとそのまま歩き出したので、その後をあわてて二人は追いかけていったのであった。

「時雨さんは忍者がいると思いますか？」

唐突にそんなことを言われ、少年はちょっとびっくりしたが……なんだか老婆の顔が笑っていたので冗談を言ってるのかと思って聞き返してみた。

「おばあさんはいると思いますか？」

「ええ、いると思います。」

「僕もいると思いますよ。」

その後、幽霊もいるんだから忍者もいたっていいだろうと思った少年であった。

「ここいらで農作業をやっているとね、たまに、一陣の風が吹くんですよ……。それでね、私どもはそれを忍者だと思っているんです。まあ、良くあることですがね……。」

笑いながら話しかけてくる老婆に対して少年は自分たちが住んでいる近くにもそんな話があるんだなあと思いながら聞いていた。幽霊は先程からずっと老婆の姿を眺めていた。

「さ、つきましたよ。ここが貴方達が探していたお寺です。後は寺のものが世話をしてくれると思います。」

「ありがとうございます。」

寺を見た後、少年は老婆に振り返って例を述べたが……。既に老婆の姿はなく、強い風が吹いただけであった。幽霊も寺を見ていたので老婆がどこに行ったのか見ていない。

「……あのおばあさん、忍者かも……。」

「ははっ、今更何言ってるの、確信もないのにそんなことを言ってる駄目だよ。時雨、物事はきちんと確立しておかなきゃ……。それに、どうやら寺の住職さんがお目見えのようだよ。」

幽霊が視線を向ける先にはいかにも住職といった感じの人が威厳たつぷりに立っていた。

「どうも、至芸といひます。貴方が時雨さんですね？」

「え．．．ええ、そうです。こっちは満月さんといひます。」

「どうも、よろしくお願ひします、至芸さん。」

「こちらこそ．．．では早速、時雨様にはこちらに来てもらひます。」

物腰が柔らかい感じのような人だが．．．なんだか怪しい雰囲気もある人であつた。とりあえず、少年と幽霊はその後ろを追いかけていったのであつた。

「お部屋はここでございます。荷物をおきましたら境内に来てくださいね。」

そういつて姿を消した住職を見て、再び、幽霊は首をかしげた。

「ううむ、絶対、何かがおかしい気がするんだけど．．．。」

「まあ、気のせいじゃないかな？さ、行きましょう。」

幽霊と二人して、境内へと姿を現した少年は今度は近くを流れている滝に案内された。

「さ、今日はこの滝に打たれてもらひます。．．．時折、何か落ちてくる可能性も否定できませんので．．．気を付けてくださいね？」

目をつぶつて集中している最中に何か落ちてきたらそれを避け

るのは不可能じゃないかなあと思いながらも少年は黙って滝に打たれにいったのである。

「この服をどうぞ。」

真っ白の服を渡され、少年はそれにさっさと着替えて滝に入って・
・悲鳴をあげながらも滝に打たれ始めたのであった。

「さ、満月さんもどうぞ。」

「え！あたしもですか？」

「無論です。」

少年の悲鳴が聞こえてくる滝を指差して坊主は答える。幽霊は首を振ろうとしたが・・・坊主の言いようもない視線に手を上げて大人しく従ったのであった。

「のわあああつああ！！！」

と二人仲良く叫びながら修行？に耐えている。

坊主はそれを見届けると、視界の端に捕らえた人影のもとへと向かう。

「・・・作戦は今日の夜、決行だそうです。至芸さん、協力感謝します。」

「いえ、私は当然のことをしただけです。それに、なんだかあの少年は只者ではない感じがするのですよ。」

「・・・そうですか、それでは、よろしく願いします。」

黒い人影は音もなく、消え去り・・・後に残ったのは滝に打たれている二人の悲鳴と・・・そんな二人を見ている坊主だけだった。その頃、寺の近くに作られている簡易会議場には黒い布を纏った人影が数人、集まっていた。

「・・・あの少年が標的か・・・しかし、あの天道時家の息子だとはな・・・。」

「ま、私たちが実際にするものではありません。氷雨が頼まれた依頼ですので、あの子がどうにかするに違いませんよ。長老様、私たちはあの二人が逃げ出さないように見張るだけです。さて、あの子達の実力とやらを見せてもらおうかしら？」

突

十五、

その夜、精進料理に涙を流しながらも少年と幽霊は部屋（ここだけ中身は他のところと違い、洋風である。）で話をしていた。

「はあ、何でこんなところに僕らはいるんですかね？」

「さあ？私の感だけど・・・またなんか面白いことがあると思うよ？時雨、きちんと木刀持ってきた？」

バックから突き出ているものを眺めてのんびりと少年は答える。

「ええ、言われたとおり、持って来ました。まあ、誰に襲われるかは分かりませんがね。」

「備えあれば憂いなし・・・ま、気をつけておいたほうが念のためだつてことだよ。」

幽霊の言葉は間違つていなかった。その二分後、境内のほうから凄い音が聞こえてきたのであった。

「・・・満月さん、今、凄い音がしませんでした？」

「さあて、何か面白いことが起きたんじゃない？ほら、木刀持って出かけよう！」

元気に笑いながら幽霊は立ち上がり、先に廊下へと出て行った。その後を、少年が化け物が出ませんようにと願いながら追いかけて

いったのであった。

その頃、彼の母親は執事と話していたのであった。

「・・・時雨様は本当に大丈夫でしょうか？」

「ええ、大丈夫のはずよ。それに、あの子が駄目だったとしても、次がいるわ。」

「・・・。」

「刺客に選んだあの二人にもそれぞれ、条件はつけてあるわ。一度失敗したらそれで終わり・・・。その後は時雨の友達となつてあげるというのが条件よ。敗北条件はお嬢様が逃走された場合。忍者さんの場合は・・・。」

にやりと笑つたその顔は悪戯を思いついたような顔であつた。

「・・・境内に何人か人がいるよ、時雨。」

本堂の中から様子を伺う幽霊の目には黒装束の人間が何かをしているように見えた。一緒になつて少年も覗き込む。

「何をしているんでしょうね？」

「さあ？でもさ、あれって忍者だよね？」

月の光に当てられ、その姿は確認できる。少年もその姿を眺め、写真に収めようか真剣に悩んだところであつた。だが、忍者たちはあつという間に姿を消してしまつた。

「……？」

少年は忍者たちがいた場所に歩いていって見たが……何もなかった。そして……。

「時雨！上に気をつけて！」

幽霊の声が聞こえ……上から何かが降ってきた。それが何かを確認する前に、少年は急いでそれを避けた。

「な、これは……。」

地面に突き刺さっている黒い棒のようなものを確認して少年は驚愕した。クナイである。一昔、少年も忍者に憧れて、クナイを投げる練習をしたものだ。まあ、三日で終わってしまったが……。

「誰だ！」

少年は一陣の風を感じながらクナイが飛んできた方向へと視線を滑らせ、確認した。月をバックに一人の忍者が立っていた。

その姿は黒く、覆面をしており……少年曰く、かつこよかったそうだ。

「……。」

忍者は無数のクナイを取り出して少年へとプレゼントした。だが、少年はそれを避け……幽霊のもとへと戻ったのであった。

「ひゅー、あの忍者やるねえ。だけど、投げ専門の姉さんに比べたらちよっと甘いかな？時雨、訓練しておいて良かったね？」

「そうですね、してなかったら今頃・・・お団子になっていところでしたよ。とりあえず、逃げたほうがいいんじゃないんですか？」

提案を試みるが、その提案を幽霊は手で制した。

「・・・それは無理かな。誰かがさっきから私たちを監視してるみたいだし。ま、後ろが駄目なら前の敵を倒したほうがいいんだよ。これ、常識だから覚えておいてね？」

引いて駄目なら押してみる精神で幽霊は少年に告げると、少年と呼吸を合わせた。

「これぞ、ごちゃ混ぜ状態。時雨、行こう!!」

「分かりました!」

木刀を左で構え、少年は大地を蹴った。目指すは漆黒の忍者である。忍者も投擲が通用しない相手だと気がついたのか、背中に挿していた短刀を抜いて戦闘体制へと移行した。

「・・・。」

「うおおおお!」

少年と忍者はお互いの獲物をぶつけた。そして、その場でぶつかり合った結果、一度間合いをとるために離れる。

「ううむ、真剣とぶつかり合ったのに木刀が壊れてないなんて・・・

これ、本当に木刀？」

「……………」

忍者は棒手裏剣を少年へと投げつけるが、それを少年は器用に交わして忍者へと踊りかかる。

「せやああ！」

「……………」

忍者は後数歩というところで避け、木刀は残像を残しながら近くにあった木に直撃。木はその場で霧散した。

「……………」

「……………」

その威力にお互い、驚き……少しの時間が流れる。

「満月さん、何ですか、この威力は！！これ絶対に木刀じゃないでしょー！！」

「本気で振りすぎ！！力下限が分かってないんだよ！！」

青く光る何かにびびりながらも少年は忍者に木刀を向ける。そして、馬鹿の一つ覚えのように再び突撃して行ったのであった。

「うおおおおー！！」

今度は完璧に避けられなかったのか、木刀の先端が黒い布を捕らえた。その部分は見事に霧散してしまった。

「！って、不和さんじゃないか！」

「あ．．．．。」

顔を覆っていた布は剥がれ落ち、その顔を確認して少年は驚いた。髪を下ろしていない状態の根暗少女が姿を現した。

「ち、違います！！私は不和ではありません！」

髪を何時もおろしているのだから白を切れると思ったが．．．少年はそれに気がついていた。

「だって、不和さんの目は澄んでいて一発で分かるよ。」

「．．．！！！」

その頃、未だに会話をしていた執事と少年の母親。

「彼女の場合の敗北条件は姿を見られ、二回以上．．．時雨に名前を呼ばれてしまうことよ。」

「何故、そのような条件に？」

「それはね、友達から名前を呼ばれるのは嬉しいことなのよ．．．
・小さい頃の時雨にそっくりだった氷雨ちゃんねえ、実は、私がつけた名前なのよ。」

「成る程、名付け親ですね？」

「ええ、きつとあの子は時雨に敗北したとき、良かったと思うわ。」

そういつて再び、悪戯に笑ったのであった。

「……不和さん、忍者だったの？」

「え……うん。家が代々、忍者でね……跡取りが生まれなかった私の家では結局、私を男のように扱うようにしていたんだけど……ずっと訓練してたせいで友達も出来なくなっただよ。だから、私は全うな人生を生きるために忍者のまま、今の人生を送り始めたんだよ。だけどね、それ以降友達がまったくできないんだ。」

「そうだったんだ。」

境内に座って根暗少女は溜め息をついた。そして、立ち上がって更に答えた。

「ま、これで私の貴重な友達も一人、消えちゃったなあ。でも、しようがないよね？友達の命を狙っていたんだから……。」

そんな手を掴んで少年は答えた。

「大丈夫、僕はなんともなかったから友達だよ。それに、止むに止まれぬ理由があったんでしょ？それならしょうがないよ。」

少年はそういつて笑った。その笑みには邪気はなかった。

「ありがとぅ、時雨君……。」

その夜、少年はいい夢を見たとのことだ。

突（後書き）

どうも皆様、作者の雨月です。今回も読んでくれて有難うございました。御意見等をよければいただきたく思いますので、時間があつたらお願いします。さて、気まぐれな今後の展開ですが・・・これから少年は大変な目に会う予定です。

投

十六、

次の日、少年は四時起きであつた。と言っても、坊主によって起こされたのである。

「・・・ふあ。」

そして、朝から冷たい水を汲んできて、境内の掃除を行っている。因みに、少年をしとめ損ねた忍者も一緒になって修行を行っていた。

「時雨さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫。眠いだけ・・・。」

幽霊なんかは時雨の方に器用に止まってうつらうつらしている。

「・・・ぐう」

目を開けたまま、少年は鼾をかき始めた。その様子をどこから見ていたか知らないが、飛礫が飛んできた。それは見事、少年の額に直撃した。

「うがぁ！はっ、しまった・・・寝てたみたい・・・。」

そして、再び境内を掃除し始めた。しかし、ある程度はわき進めるとうつらうつらとなってしまう。今度は、卒塔婆の陰から水鉄砲が噴射。寝ている少年の顔に直撃。

「ぶはあ！！あゝ埒が明かないなあ。」

その肩に幽霊を乗せたまま、少年は離れて掃除をしている忍者のもとまで近づいて滝に当たってくると伝えておいた。

「・・・大丈夫なんですか？」

「大丈夫ですよ。ま、目覚ましにはちょうどいいと思いますし・・・」

肩に幽霊が乗っていることを忘れて、少年はそのまま滝に入ってしまった。びっくりしたのは幽霊である。花畑を歩いてると、急に真上からスコールが降ってきたと語っている。

「きやあああああ！！」

まさに、寝耳に水である。不意打ちよろしく、少年を滝つぼへ蹴り倒し、自身も驚き、滝つぼへと転落。二人して朝から水泳をしてしまう羽目となった。この時期には少々早いプール開きだ。

「満月さん、危ないって！！」

「危ないのはこっちだ！！いきなり人を滝に放り込む奴がいるか！！」

そんな二人を見ていた忍者は苦笑しながらもその光景を眺めていた。そして、自分にもあの輪の中に入りたいなあと思ったのであった。

「死ねばもろとも！そこに立っている忍者さんも餌食になりなさい

「!!」

恐ろしく早い水鉄砲が五十メートル以上離れている忍者の体に直撃。忍者は思う。やっぱり、一人のほうが良かったかもしれないと……。

忍者も竹箒を放り投げ、滝つぼの中にいる二人に踊りかかったのであった。そのスピードがあれば、少年たちに勝てたかもしれない。まあ、やまない雨はないという淒く当然な道理のように三人は坊主に叱られた拳句、朝食を抜きにされた。更に、本堂を雑巾が消しておくようにとまで言われたのであった。

寺なのに 鳴るのは皆の 腹の音 天道時 時雨

世の無常さと、悪戯しすぎたと反省している少年の気持ちを素直に表している一句である。まあ、季語が入ってないのはご愛嬌で勘弁してもらいたい。

それから約一週間そんなことを繰り返していき、とりあえず精神を集中させることだけは慣れた少年であった。その顔は寺に来る前とかなり違っていた。かなり、辛そうである。

「大丈夫、時雨君……。」

「はは、大丈夫大丈夫。まあ、お寺での生活なんてそんなことはめったにないからたまには良かったなあって思ってるよ。うん、ほとんど寝てないって思うのは僕だけかなあ。」

枕投げ、仏像の右腕を折ったり、廊下に滑りやすいような仕掛けをしたりと殆どは幽霊が悪戯しまくったのだが連帯責任として少年と忍者にも罰がくだったのであった。それは日頃に酷くなっている。ており、忍者と幽霊は平気であったが少年にはきつかった。

「鍛え方が違うからだよ。うん、時雨にもいい教訓になっただろう

「？」

「はは・・・そうですね・・・」

幽霊は幽霊なので寝ても寝なくても変わらないものなのかと少年は思いながらため息をつきながらバス停のベンチに腰掛けた。そのうち、少年の首はふらふらさまよう振り子となって前に後ろにふらふらし始めた。

「ま、少しは私も疲れたから・・・氷雨ちゃん、私もちよつと寝させてもらうよ。」

「え、はい、わかりました。」

忍者にそう告げて、幽霊は姿を消した。起きているのは忍者一人となってしまうた。少年はそんな忍者の膝の上に頭を乗せたのであった。

「あつ・・・。」

「ぐう～～」

なんとも微笑ましい光景に忍者は頬を染め、少年は鼾をかき始めた。近くには誰も居らず、バスが来るにはまだ、時間がある。（あと、二時間ほど余裕がある。）そんな少年を見ていると、忍者も眠たくなってきたのであった。

そして、忍者が目を覚ますと・・・バスがちょうどやってきたのであった。

「あ、時雨さん、起きてください！」

少年は既にベンチの下に落ちており、目の下にクマなどが出来ているので一見すると死んでしまったようにも見える。そしてなにやら、寝言を呟いている。

「ううん、硬いよお！プリンがこんなに硬かったなんて・・・うわぁ！このプリン、山菜で出来てるよ！やった、今日の味噌汁は具が多い！！」

そういつて近くに落ちている小石に噛み付いていたりもしている。よほど、精進料理が少年の神経を蝕んでしまったらしい・・・。

「お客さん、乗るの、乗らないの？」

「あ、乗ります！ちょっと待っててくれませんか？」

起こすと色々と可哀想なので少年を担いで忍者はバスに乗った。バスの中は誰一人も乗っておらず、幽霊も姿を現していない。

バスは静かに動き出し・・・その振動につられて忍者も再び寝てしまったのであった。

「・・・ん？」

少年は目を覚ますと頭を起こして辺りを見回してみた。振動音が聞こえてきており、どうやらバスに乗っているようであった。そして、自分の頭は何だか柔らかなものに乗っている。

「あ、膝枕・・・。」

急いで頭を起こして状況を確認。バスの隣の席では忍者が静かに寝息を立てて寝ていた。

「……………」

少年はそんな忍者の顔を眺め、目をこすってバスの外の景色を見てみた。色々な看板が物凄いスピードで後方へと姿を消していつており、後ろからはパトカーのサイレン音が聞こえてきている。乗客は他にはなく、少年たち以外は運転手しかない。

「……あの、パトカーが追ってきてますけど……スピード出しすぎじゃないんでしょうか？」

運転席にそんなことを言うと、運転手さんは振り返った。その顔に当然のように見覚えはなく、そしてその人はどこからどう見ても運転手には見えなかった。目だし帽をかぶっており、小脇にハンドバックを抱えている。ハンドバックからは入りきれないほどのお札が見えていた。

「……………!!」

今まで少年たちがいることに気がつかなかったのだろうか？どこからどう見ても銀行強盗の男は少年に驚いてハンドルを思いっきり左に切ってしまった。

ガシャーン！

当然のように壁にぶつかってしまい、そこでバスは動かなくなってしまった。少年も危うく怪我するところであったが、寝ている忍者を掴んで椅子の取っ手を思いっきり掴んでいたので無事であった。

そして、銀行強盗の男も奇跡的に無事だったのか気絶だけで助かったのであった。

「……！時雨さん、どうかしたんですか？」

流石に目を覚ました忍者は今の状況を見て驚いていた。バスは逆さまになっており、少年の腹の上ののつていたからである。

「さあ？なんだか知らないけどどうしてかこうなったんだよ。」

パトカーがやってきて、少年たちは無事に保護された。そして、銀行強盗も逮捕され……。丸く収まった感じであったが、一つだけ問題があった。

「あれ？か、母さん！」

パトカーの一台に少年の母親が同乗しており、スーツ姿であった。

「時雨、話があるからちよつと来てもらえないかしら？」

「……わかりました。」

その顔は厳しく、引き締まったものであった。周りにいた警官と忍者も緊張した顔になった。

少年をパトカーの中に入れ、母親は車を出すように言った。

「あの、氷雨さんは？」

「彼女は他の者にきちんと送らせるわ。時雨、悪いけど予定を切り上げることとなったの。」

「どういづことですか？」

このシリアスな展開に寝癖がついたままの少年ではちと役不足だ。ここは誰かに代わってもらったほうがいいかもしれない。

「そうね……ここでは話しづらいから、やっぱりお屋敷で話してあげるわ。大至急、車をお屋敷に飛ばして。」

前に座っている警官にそう指図すると、警官は頷いてボタンを押した。結果、車は自由な鳥となって離陸したのであった……。

投（後書き）

さて、皆様作者の雨月です。実のところ、苦しいことがあるんです。それは、今後なんです。あっちのほうは魔界なぞに行きましたが、こっこの時雨は多分、いきません。まあ、おひまな方がおりましたら、ここが悪いなどと教えてほしい所存でございます。それでは、これからもがんばっていきたいと思いますので、皆様も風邪^{インフルエンザ}などにかからないよう気をつけてください。

防

十七、

少年を乗せた謎の車？はかなり広いところに着陸したのであった。

「さ、降りてついてきなさい。」

運転手の姿はいつの間にか警察官から執事の格好になっており、少年の母親が乗っているほうの扉を開けた後、少年が乗っているほうの扉も開けた。

「ささ、坊ちやま。」

「あ、すいません。」

少年は母親の後ろを追いかけながら執事に頭を下げてその場を後にした。家を出たときはもう少し小さかったような感じがする家だが、今では比べるものが他にないため、どの程度でかいのかさっぱり確認することなどできそうになかった。

「どう？久しぶりでしょう？」

特に感情をこめていない母親の声を聞いて少年は頷いた。

少年が家を出たのはかなり前であり、もはや覚えていない。かすかに残っているのは父親の葬式に出たぐらいである。少年が家を出ることになったきっかけは、彼の父親が死んでしまったことであった。少年が生まれて二年後ぐらいに死んでしまい、その後、母親は莫大な財産で更なる利益を増やし、もともと大企業だった父親の会社を更に大きくしたのであった。

「さ、入りなさい。」

「あ、はい。」

屋敷の扉はでかく、それをくぐって少年は驚いた。

中にはお手伝いさんがごろごろ・・・失敬、多くのメイドさんや執事さんが頭を下げていたのであった。少年は噂でこの会社の大きさを知っていたが、ここまで大きかったとは思ひもしなかった。少年は静かな場所などが好きなので、こんなに人が多いところでは少しばかり、緊張してしまい、心に安定を求めてしまうのであった。

隣の母親は全く持つて平常心。近くに立っているのはジャガイモの花と葉っぱみたいな視線で彼らを見ている。

「・・・さ、ついてきなさい。」

そういつて一人で進みだし、会談をあがっていったので急いで少年もその動作に習ってメイドさんや執事さんに頭を下げながら進んでいったのであった。

そして、一つの大きな扉を開け、少年と母親はそこに入ったのであった。

「・・・母さん、話って何ですか？」

「そうね、そろそろ話しましょうか・・・。」

高級そうな椅子などは一切無い部屋で、どちらかというと物置のような場所であった。

「実はね、厄介なことに・・・私たちの親戚・・・といっても、全

くつつていい無関係にあたる『津波』グループがこの会社を乗っ取る気になったらしいのよ。それで、今のところ一番跡継ぎの可能性の高い貴方を呼んできたの。」

少年は思いつきり首をひねって考えてみた。答えになっていない。

「母さん、つまり僕は何の為に連れてこられたんですか？」

「・・・実は、あっちの考えをもっと詳しく聞く為に囷になつてもらうわ。あちらさんのトップの子どもと話をしていればいいわ。何でも、同じ年で、会社を軌道に乗せた張本人だそうだから・・・貴方と仲良くしている隙に、私たちが部下を締め上げて少しでも情報を手に入れるわ。わかった？」

その目は既に母親というより、冷徹な女社長といったほうがしつくりきってしまったて怖いといった感じであるので少年は首を縦ではなく、横に思いつきり振った。

「無理ですよ。と言うより、するきになりません。母さん、他にも候補がいるのならその人を使ってください。」

「・・・わかったわ。貴方がそういうのならしょうがないわね。先に部屋を出ておいて・・・」

少年は言われた通りに部屋を退出した。いまだに背中に背負っているリュックからは木刀が突き出ており、部屋から出た少年の首筋辺りに幽霊が姿を現した。

「へえ、時雨もやるねえ？」

「気のせいだよ。ここでは出来るだけ首を出さないほうがいいよ。ばれるから……。」

少年にそう言われ、気の無い返事を幽霊がしたところで執事がひとりやってきた。何でも、家に送ると言ってきたのであった。少年は頷き、それに従った。

そして、数日後……いつもより少しばかり楽しい生活を送っていた少年に事件が起こる。

その日は幽霊に忍者、お嬢様、妹と一緒に下校していると、道端に着物を着ている女性が倒れていた。その着物は鮮やかな緑色であった。

「時雨！急いで救急車呼んで！！姉さんは生死の確認！残りの二人は何でもいいから祈ってて！！」

幽霊が迅速かつ、適切？な判断を下し、言われた皆はその通りに動いた。そして、救急車も素早くやって来て倒れていた女性を連れて行った。そのメンバーの中でもっとも年上であったお嬢様が同行したのであった。残りの皆はそれぞれの家に向かって帰っていった。

「……ただいま。」「」

三人で家に着くと、誰かが来ているようであった。客室の一室からメイドが姿を現していた。そして、困ったような感じで少年のもとへとやってきていた。

「あの……時雨様にお客様です……。」「

「僕にお客？母さんかな？」

「いえ・・・その・・・。」

なんとも齒切れの悪い言葉で喋りながら少年の後ろへと隠れたのであった。いつもと違う感じの態度に戸惑いながらも少年はお客が待っているという部屋へやってきた。途端、何かが振り落とされたのであった。

「のわっ!!」

少年はそれを見事に手で押さえ込んだ。そして、反射的に言葉を発した。

「何奴！姿を見せい!!」

「ふん、少しはやるようだな・・・。」

刀を振り落とした犯人は少年の首辺りまでの身長の子であった。刀はよくよく見れば木刀で、これなら安心・・・まあ、当たっていたら悪くて石の下であろうが・・・。

「君は・・・？」

少年は木刀を放してまじまじと相手を見やった。後ろからは幽霊たちが見守っている。

「私の名前は梅波^{つがなみ} 三簾^{みれん}。『津波』のものだ。」

「『津波』？何処かで聞いたような・・・。ああ、思い出した。母さんが話してたっけな？それで、その梅波さんが何か僕に用があるの？初対面だっと思うけど・・・。」

少年はのほーんと構えており、花畑オーラが体からにじみ出ている。それを見ていた相手はいらいらしているようだ。

「先手をうちに來たのだ！庭に出ろっ！！貴様は我が道の邪魔となるものだと思われる！！」

「わかりました。外で話したいんですか？」

半ば頭の上に疑問符を出しながら少年はそれに従って外に出た。そして、それを追いかけるような感じで他のギャラリーも場所を移す。

刀剣少女は木刀を地面に置き、まるでマジックでも見るような感じで何処からか真剣を取り出した。刀身は紫色に染まっており、見たところかなり怪しい。

「成敗してくれる！！剣を抜け！！」

「ちょっと待ったあ！！何でそうなるんですか！！」

ここで、第三者が現れる。

「私の出番だね？行くよ、時雨！！」

「ま、満月さんまで！？」

こうして、成り行き上どうしようもない戦いはスタートの合図もなしに始まったのであった。両者切り結び、睨み合う。そしてまた、離れる・・・の繰り返しでなかなか勝負がつかない。

「せいっ!!」

少年の髪の毛を数本、切り落として刀は何も無い空間へ進む。そこへ少年は突きを繰り出した。だが、この前の木刀の威力を思い出して手加減をする。しかし、あっさりとその木刀はかわされてしまった。そしてまた、間合いを取る。

「く、いい加減本気を出してみろ!!」

どこからどう見ても手加減をしている雰囲気（少年の右腕にはそこからへんから千切つて来た花が掴まれている。）を感じて刀剣少女は不平を垂れた。因みに、彼女のほうは至極真面目に戦っている。

「待った、どこからどう見ても一般市民に剣を向けるほうがおかしくない?」

そして、少年もまた、とても納得のいく反論を試みた。刀剣少女も動きをぴたりと止め、数分ほど考え……刀を納めた。

「すまなかった。どうやら私がおかしかった。」

「うんうん、真剣を持ってそこいらをうろついているほうが間違いないよ。警察を呼ばなくて良かったね。さ、そろそろお母さんが心配している頃だろうから、おうちに帰りなさい。」

「……失礼した。」

刀剣少女は謝罪して夕日の沈むほうに帰っていった。そして、その少女の後姿を四人で眺めながら一人が呟いた。

「時雨様、幽霊に取り付かれている人は一般市民に入るんでしょうか？」

「さあ？どちらかというと政府の実験施設にでも連れて行かれそうだね……。」

「それに、お兄ちゃん意外と強くない？」

「そうだね？あの後も普通に戦えてたかも……。」

その場一同、ならそのまま続けて決着をつければよかったのではないのであろうかと考えていた。

刀剣少女もそのことに気がついたが、既に家についていたので本日のところは諦めたそうだ。人間、諦めが肝心である。

攻（前書き）

一つの区切り目です。

攻

十八、

今日も、少年は人数の少ない教室へとやって来て授業を静かに受けていた。彼から少し離れたところの机では同じように黙って話を聞いている忍者が先生の質問に答えている。

そして、授業を終えるチャイムが鳴り響き・・・帰宅部がお家に帰る時間となった。

「あ、時雨君、担任の先生が呼んでたよ？」

「え？そうなの？わかった、ありがとう。」

どうやら担任の先生が呼んでいるようで、少年は担任教師が待つ保健室へと向かった。本当の担任教師はいろいろと問題があつて昨日やめてしまった。今のところは代理として保健室の先生が二人いた。その片方が少年たちの教室の担当となっていた。授業をしているわけではないので掛け持ちも可能であつた。

「失礼します。小林先生はいますか？」

少年はそういつて中に入ると自分と呼んでいるらしい保健室の先生の片方を探していた。おぼさんの先生と若くて綺麗な先生の二人がいて、少年たちの代理担任となっているのはおぼさんのほうであつた。

「あら、小林先生は今用事で学校にいませんよ？」

保健室にいたのは若い先生のほうであり、おぼさん先生はいなか

った。特に用事もないので保健室を出て行こうとすると・・・若い先生に呼び止められた。

「すまないけど・・・この書類を職員室にいる佐上先生に渡してくれないかな？それと、受け取りのサインもお願いしたいの。」

少年は騙されやすい性格だったのでその依頼に頷いた。

「わかりました。これを渡してくればいいんですね？」

「ええ、お願い。それと、その用事が終わったらきちんと保健室に戻ってきてね？」

保健室を出て行くとき、そんなことを言われたので少年は肯定の仕草をして職員室を目指すのであった。

MISSION！！保険の先生から渡された書類を無事に佐上先生に渡せ！！

ゲームだったらこんな感じであろうなあと少年は思いながら歩いていった。まあ、僕が何者かに襲われたりしないだろうけども思っていたが、それは間違いであった。

「見つけたぞ、天道時 時雨！！」

少年が不思議に思いながら後ろを振り返ると、そこにはいつかの刀剣少女が腰に刀を刺して立っていた。

「あ、三簾さん？ちょっと用事があるから待っててくれないかな？」

書類を見せようとしたのだが、刀剣少女はその書類に刀を振り落とそうとした。何とか少年はそれをかるうじで避けた。

「危ないよっ！！何するの！！」

「うるさい！！その書類がなくなれば私と勝負が出来るだろう？」

「あ、成る程・・・じゃない。」

少年は刀剣少女に背中を向けて全速力で走り始めた。

「己、逃げるのか？」

「当然だよ。今は君に構ってられないんだ！！」

そう言われたら無理やりでも振り向かせたいというのが人の心だ。無論、刀剣少女もその心に取り付かれていた。

「ならば、その書類は不要だっ！！」

少年を追って少女も駆け出し始めた。こうして、校舎での追いかけっこは始まったのであった。放課後なので人が少ないのが不幸中の幸いだなぁと思いながら少年は猛獣から逃げる草食動物のような心境となっていた。

「梅波奥義、影月舞！！」

後ろからはそのようなことを叫びながらむきになっている刀剣少女が追いかけてきている。少年はその攻撃を右に避けた。

そんな時、幽霊は少年たちが住んでいる洋館でテレビを見ていた。

「時雨様たち遅いですね？」

「そうだねえ、彼女とデートじゃない？あはははは！」

呑気にテレビを指差して笑っている。その言葉を聞いてメイドは少しばかり嫉妬したようだった。

「時雨様に彼女がいるんですか？」

「冗談だよ。時雨に彼女が出来るわけないじゃん。まともな連中が時雨を好きになるわけないじゃん。」

その言葉に微妙にほっとしながらも何故だか心から喜べないメイドであった。

「覚悟、時雨！！」

「勘弁してくれえ！！」

未だに少年の追いかけっこは続いており、少年は体がぼろぼろになりながらもなんとか書類だけは守っていた。時折、校舎に残っていた生徒たちとぶつかりそうになったりもする。

そろそろ職員室に到達するが、こんな状態で職員室に入ってしまったら刀剣少女は大暴れしてしまうであろう。それだけは阻止したい少年だったので、とりあえず姿を隠すことにした。

「秘技、上着脱ぎ！！」

学ランを刀剣少女の顔面へと投げつける。

「ふん、こんなものが私にあたるとでも思ったのか？」

それをあつさりと交わして相手に襲い掛かるうとしたが・・・肝心の相手はどこにもいなかった。

「く、逃げられたか？だが、この付近にいるはずだ。」

そういつて少年が向かっていったほうに刀剣少女も姿を消した。そして、その廊下には一人の人間も残っておらず、学ランが廊下に残されていたのであった。だが、次の瞬間には学ランをどけて下から人が出てきた。

「ふう、助かった。さて、そろそろ下校時間だから急がないと・・・」

そういつて少年は学ランを着て今度こそ、その廊下からは人がいなくなつたのであった。

少年は職員室で書類を渡したのであった。そして、刀剣少女に見つからずに保健室へと戻ってきて保健室の若い先生からお礼を言われて外に出ると、廊下の端のほうに刀剣少女がいた。こちらに気がついたのか再び全速力で少年のもとへとやってきたのだが・・・。

「覚悟・・・ばたつ。」

少年の目の前で倒れてしまった。目を開けているので大丈夫であろう。躍起になって少年のことを探していた刀剣少女は自滅したのであった。

「おつかれさま。」

「く、今日のところはこれで勘弁してやる。だがな、私はお前を絶対に葬ってやるからな？覚えておけよ？」

「はいはい、ほら、そろそろ下校時間だから帰らないと危ないよ。」

鼻息荒い刀剣少女を立たせて少年は苦笑したのであった。そんな少年の態度に再びムカツとした刀剣少女だったがどうも自分だけが存しているような感じになったので黙って礼を言っ去っていった。

「あ、氷雨さん、待っててくれたの？」

「うん、一緒に帰ろうと思って・・・。」

顔の半分を隠している髪の間から時折潤んだ目を向けている忍者に礼を言っ少年は教室を出て下駄箱へと向かった。

「お兄ちゃん、遅いよ!!」

「あ、鈴も待っててくれたのか？ありがとう。」

下駄箱にいた妹も一緒に帰ることになり、学校の敷地から出る。そこにも少年を待っている人がいた。

「遅いわよ、時雨さん？」

「ふん。」

お嬢様と刀剣少女が二人して待っており、なんだかハーレム気分を味わっているような感じだったがあいにく、少年にはそんな気持

ちを持っていなかった。

少年を中心に囲んでいるような感じで妹は右腕を掴んでおり、忍者は左のすそ部分を遠慮しているような感じで引っ張っていたりもしていた。お嬢様は投げナイフを少年に突きつけており、刀剣少女は木刀で少年の頭をぽこぽこ叩いていた。

「・・・時雨、モテモテね？」

「そのようですね。」

離れたところから双眼鏡を構える二人組は笑っていた。少年の母親と執事である。当の少年はどことなく、嬉しそうでもあり、痛がっているようにも見える。だが、他の皆は幸せそうであった。

そしてそれぞれ、家の方向へと向かっていき、残ったのは少年と妹となった。

「お兄ちゃん、意外ともてるね？」

「そう？気のせいだよ。」

どことなく元気のない妹の頭を軽く叩いて少年は言った。そして
呟く。

「はあ、これからどうなるんだろう。」

「何が？」

「この小説の方向性・・・冗談、僕の日常。」

「大丈夫。」

そういつて妹は少年の手を握った。

「私が妹でいてあげるから。」

少年は苦笑してから洋館の前で待っている二人に手を振って家に帰りついたのであった。

攻（後書き）

皆さん、こんにちは。簡潔に述べますが、次回からはサブタイトルが増えます。一字↓二字となる予定です。

忘却

十九、

とある、河川敷にそのダンボールは置いてあった。外のほうには『男の子です、物静かなタイプで素直な子です。誰か、拾ってやってください。』と書かれており、中には生き物が入っていた。かなり遅い時間なので人っ子一人、いない。

「ママー、あれ飼っていい？」

「駄目よ、マー君。あれはね、きっと冗談なのよ。」

そういつてそのダンボールの前から母子は消え去った。既に時刻は夜となっており、どちらかという深夜だ。

「ううむ、どうして僕はここにいるのだろうか・・・？」

そのダンボールの中で少年、天道時 時雨は首を傾げた。どうも、ここ数日の記憶がなくなっているようであった。と言うよりも、名前と常識は覚えているのだが・・・家の場所と友達の名前などを完璧に忘れてしまっている。

「??????」

空に見えるのは静かなる月であった。そして、少年は懐かしいような感じの声に出会った。

「時雨、こんなところにいたのかい？」

少年が声のしたほうに首を向けると、そこには青白く光る少女が浮いていた。髪は腰辺りまで伸ばしてあり、丈の長いドレスを着ている。胸はあまりなさそうである。

「あのー僕のお知り合いですか？」

「あちやーやつぱり失ってるねえ、記憶を……。」

少しばかり残念そうな顔して空飛ぶ少女は蝶のような溜息をついた。その右腕にはよくよく見るとかなり細長い西洋の剣が握られている。その細さは小指ぐらいの細さだが、月明かりに照らされて反射している剣の刃の部分は危なっかしい感じを出している。

「思い出した？」

「いや……なんだかどっかで見たことあるんだけど……思い出せないよ。」

少年は首を振って再び目の前にいる少女を見た。

「君、なんて名前？」

「私？私の名前は満月。満月・トロワド。うーん、困ったなあ。そうだ、今から少しばかり私の話を聞いてくれないかな？」

「はあ、わかりました。」

少年はそういつて再びダンボールの中へと戻った。そして、それを合図に少女は話し始めた。

少年が家に帰ってこない。それは、今から数時間前のことである。

「満月さん、お兄ちゃん知らない？」

「？いや、知らないよ。美奈さんと一緒に買い物じゃないの？」

「そうなのかな？」

その時は誰一人として少年の行方を心配している人などどこにもいなかった。その後、メイドが帰ってきて、話は急転する。

「ただいま戻りました。」

「あ、美奈さん、お兄ちゃんは？」

「時雨様ですか？私と一緒にではありませんが・・・？」

三人は速急に集まって会議を始めた。そして、地域分担をして捜索を開始した・・・のだが、当の本人は二人組に連行されていた。忍者とお嬢様に・・・。

「すみませんね、時雨君。」

「まあ、しょうがないわ。これも時雨さんのためよ。」

そういつて気絶させた少年を抱え上げ・・・（落ちている青少年が読むには少し早い本を見つけてそれを見ようとしたところ、後ろから不意打ちされたのであった。）そして、その不覚を取った少年は少年の母親から送られてきた謎の装置に強制的に放り込まれたのであった。

「何々、『全能力強制上昇装置』？えーっと、この装置はどんなにお間抜けでばさあっとしている人でも頭と身体能力を今よりも数倍上げる装置です。ふうん、成る程……。使い方は簡単、相手の意識を奪い、放り込んでスタートボタンを押す。」

「時雨さんを入れましたわ。さて、次はスタートボタンですね？よいしょっと。」

「そして最後に、コースを選択する。ボタンは右から極悪、悪、善、極善とあり、その人の正確にあったものを選択します。」

「ぼちつとな。」

「なお、この装置を使った人の記憶はある程度、消去されます。ご了承ください……。！」

見た目どこからどう見ても洗濯機を急いで止めに入る二人。だが、急に携帯電話が鳴り出したのでそれを手に取った。

「時雨さんのお母様！？これはどういことですか！！」

電話の相手は少年の母親であった。何かあったのか執事の半狂乱のような声も聞こえてくる。

『あゝその装置を今すぐ何処かに隠しておいてくれないかな？執事に見つかってしまったのよ。』

「しかし……。既に時雨さんが在住ですが……。？」

『大丈夫、その装置を使えば時雨の記憶はなくなるけど……。その

子が思い出したいと願うのなら、きつと思い出してくれるからね。
あ、うるさい執事が着たから私はこれで失礼！！追伸、その装置が
終わったときは絶対に気を抜かないこと、もしも気を抜いたら時雨
はいなくなるからね。」

一方的にかかってきた電話はガチャリと切れて言葉を発しなくな
った。そして、二人はその装置がいつの間にか止まっており、少年
の姿がないことによりやく気がついたのであった。

「リベナさん、どうしましょう・・・。」

「どうもこうもないわ。急いで時雨さんを探しに行くのよ!!」

二人はその場から急いで姿を消して少年を探し始めたのであった。
だが、少年は実はそこらをつろついていたのであった。

「うええ、気もち悪う。」

そしてそのまま、近くの川へとダイビング。そのまま流されるこ
と、数時間・・・既にカレンダーは一マス駒を進めており、次の
日になっていた。少年の体は何者かによって引き上げられて今に至
る。

その頃、幽霊たちは色々と聞いて回っていたのだが・・・少年の
姿を確認することは出来なかった。

「ううむ、時雨は何処に行ったんだろ・・・。」

幽霊は一人、町をふらふらと歩いていた。とりあえず、こちらの
方角にはいないことは確認できたので、一旦、家に戻ることにした。
洋館が少年搜索隊の本拠地であり、一時間探して見つからなかった

ら一度戻ることとなっていた。時刻は午後九時。いつもだったら今頃少年と幽霊が部屋ではなしなんかをしている時間でもある。

幽霊が洋館へと帰宅すると誰もいなかった。もしかしたら部屋に少年がいると思って幽霊が部屋を覗いてみたがいなかった。代わりに、寝床の木刀が青い光に包まれていたのであった。幽霊は気味が悪いと思いつつもその木刀を掴んでみた。すると、木刀はそれ以降、発光しなくなったのであった。と、誰かが帰ってきたようだ。

「あ、美奈さん・・・時雨はいましたか？」

「いえ・・・いませんでした。」

帰ってきたメイドにあちらのほうにはいなかった。と伝え・・・そろそろ警察に捜索願を出そうと真剣に考えていると、お嬢様と忍者がやってきた。その顔は青ざめている。

「どうしたの、姉さんたち・・・なんだか存在しないモンスターでも見たような顔してるけど？」

「満月、ちよつと大変なことになったのよ・・・ところで、時雨さんはいるかしら？」

切羽詰ったような感じで言われたが、とりあえずこちらの事情を説明した。

「成る程・・・やっぱり帰ってきてないのね。」

「どういふことです、姉さん。説明してください。」

その場で洗濯機のような機械に少年を放り込み、その後、少年の

姿が消えたことを告げて・・・二人は話し終えた。それを聞いた三人は愕然としていた。

「とりあえず、時雨様を探しませんと・・・。」

「そうだね、探そうよ。」

再び、少年搜索隊に二人を加え、少年を探し始めた。念のため、木刀を持参していたのであった。幽霊はその途中、刀剣少女と会ったのであった。

「あ、満月さん。時雨？時雨なら川で見かけましたよ？」

「ありがとう。」

そして、今に至る。

「成る程・・・それで僕はこんなところにいるんですね？」

「まあ、そういうことになるかな・・・。ところで、名前をきちんと覚えてるの？」

幽霊にそう言われ頷いた。そして、幽霊は立ち上がって少年の手を掴んだ。

「家に帰ろ、時雨。」

「ええ、お願いします。ところで、その物騒な光を纏っている剣は何ですか？」

「これ？これは時雨を見つけたときにこうなったんだ。うん、そう
いえば時雨が覚えてるわけないか・・・。」

初対面の人から私のことを覚えてますかと聞かれても知っている
わけではない。知っていたらそれは運命という奴だろう・・・。
ともかく、少年の記憶はなくなっただけであり、これからどうなる
のであろうか？少年は転校するさきの小学校で友達百人できるかな
といった状態であった。

記憶（前書き）

おっしやー、皆様のお陰で二十回目まで続いたぜエ！・・・あ、十回
目の時は何もしてないような・・・ま、まあ・・・これからもよろ
しくお願いします！出来たら、感想書いて下さいね。

記憶

二十、

その日、帰ってくると既に全員が洋館にそろっていた。その中には刀剣少女の顔もある。

「お兄ちゃん！！怪我不い？」

「……………」

見知らぬ少女にそんなことを言われても驚くだけだろう。少年は首を傾げてこの少女が自分の妹であるようだなと考えた。しかし、名前を知らないので頬を指でかくぐらいしか出来なかった。

「鈴ちゃん、時雨は記憶を失ってるんだよ。さて、因みに、自分の名前などは覚えているからね。時雨、もう一度自己紹介をさせてもらうよ。」

少年は幽霊を見て頷いた。幽霊は他の方々を一系列に整列させ、左のほうから順番に自己紹介させていくように指示した。

そして、少年は一番左にいる少女に眼を向けた。その少女は少々、目線を下に反らす。髪は肩ぐらいまで伸ばしており、身長は少年の肩ぐらいだ。因みに、少年の身長は170位である。顔は可愛いといえは可愛く、そうでもないといえはそうでもないかもしれない。悲しいかな・・・胸は無いように見えないでもない。

「天道時 鈴といいます、お兄ちゃんの義妹です」

「どうも、こちらこそよろしく。」

少年は頷いて頭を下げた。

そして次に、右に向ける。

そこに立っていたのはメイド姿の少女であった。そのメイドはどことなく、潤んだ瞳を少年に向けていたので少年が今度は目を反らす番であった。髪は背中辺りまで伸ばしており、リボンでまとめていた。顔は少し、疲れているのか優れていなかった。胸はどことなく中途半端の気がする。身長は少年より少しばかり低い。

「メイドの美奈と言います。時雨様のお母様に仕えておりました。時雨様の為なら何でもする覚悟があります。」

「え……どうもありがとうございます。」

「美奈さんずるい!!」

隣からは妹が文句を言っているがメイドはそれを無視した。幽霊は咳払いをして、先を促す。

少年はメイドの右のほうでもじもじしている根暗な少女を見た。

「うっ、自己紹介なんて苦手ですよ。」

と独り言を言っている。少年はその根暗少女を観察してみることとした。髪は目が隠れるくらいまであり、時折見える瞳は透き通っていた。身長は少年と同じくらいで、胸はあるほうであろう……。

「……ふふふふふ、不和 氷雨ですっ!!時雨さんとはお恥ずかしながら同じ教室です!!これからもよろしくお願いします。」

「あ、クラスメートなんだ……こちらこそ、お願いしますね?」

「はいっ!!」

顔を真っ赤にして更にこれでもかといった具合で煙まで噴出して
いる。メルト状態かもしれない。真っ赤に染まった忍者を通り越して、
今度は同じく見た目真っ赤な少女へと視線を移す。

「どうも、時雨さん。リベナ・トロワドよ。貴方のそこを狙ってる
わ。」

そういつて少年の心臓辺りを拳銃のような仕草をして口でバーン
と言っている。少年は微妙にそのお嬢様から距離をとった。これは、
純粹に命を狙っているとするべきものであって、他の少女たちは何
故だかびっくりしている。

「はあ、冗談よ、冗談。」

「・・・よろしく願います。」

両手でやれやれといった仕草をしているお嬢様から視線をスライ
ドさせて今度は腰に木刀と真剣を挿している少女を眺める。

髪は短く、身長も妹ぐらい小さい。身長が低いから知らないが、
胸は大きい。

「・・・梅波 三簾だ。お前とは何度も刃を交えている俗に言う、
ライバルという奴だ。」

「・・・まあ、なんだか分からないけどよろしくおねがいます・・・
」

少年はこの人は行動を歩いていて警察に捕まらないのだろうかと思いつながら、黙っておいた。最後に、幽霊が再び少年の目の前に現れる。

「どう？全員の名前を覚えた？」

「ええ、まあ・・・ところで、鈴ちゃんは僕の妹だから前から知っているとして、他の人たちとは何時知り合ったのか分かりますか？旧友でしょうか？」

誰一人、首を縦に動かす人はいなかった。幽霊はその場を代表として告げた。

「時雨、悪いんだけど・・・私たちが貴方に知り合ったのはこの一ヶ月以内よ。以前の貴方に話を聞いたところ、女関係は全くといってなかったといってたよ。」

「僕、もてないんですねえ」

少年はポツリと呟いて影を落としたが・・・今日はとりあえず皆に帰ってもらうことにした。既に時刻は明日になっている。

「まあ、時雨・・・今日は皆に泊まってもらった？遅いし・・・途中で襲われたら時雨が責任取らなきゃいけないかもよ？」

幽霊にそう言われ、少年は考えた。それもそうだと思い、少年は皆に改めて告げた。

「この洋館に泊まりたい人は泊まって行ってください。幸い、明日から連休ですので・・・。」

少年を探し回って完璧につかれていた少年と刀剣少女を除くほかの女の子たちは頷いた。

この洋館には屋根に上れるところがあり、少年は一人、月光を浴びていた。

「何してるの？」

その隣に、幽霊がやってきたので少年は思いつきり驚いた。隣にやってきたといっても少年の隣から首だけを突き出しているからだ。少年は驚きすぎて屋根から転げ落ちそうになった。幽霊が掴んでくれなかったら今頃、ぺしゃんこになっていたに違いない。

「ありがとうございます、満月さん。」

少年は屋根に引っ張りあげてくれた幽霊に礼を述べると、再び、座った。

「時雨、何か思い出した？」

「いえ……知り合いのことを全く思い出せないんです。どうにもおかしい感じがして……。まあ、皆の事は覚えましたがね。」

「そ、ならいつものように特訓しよ？」

「特訓？」

幽霊は少年が今まで幽霊を相手に特訓をしていたことを聞いた。

「それに、何か思い出すかもしれないし……。」

「そうですね、やってみます。それで今日は・・・どうすればいいんですか？」

幽霊は月光を反射しているかなり細い西洋の剣を取り出した。そして、それを少年へと渡す。幽霊は刀を持って少年と対峙する

「さ、今日は身を守る試験だよ。それで私を退けたら今日の特訓は終わり。」

「わかりました。」

少年は剣を構え、幽霊へと突っ走った。

「はあああああー!!」

気合をこめて少年はそれを振り落とす。幽霊はそれを避けることなく、受け止める。

「うーん、やっぱり強くなってる・・・。」

「？」

睨み合い、間合いを取る。そして今度は幽霊から刀を振り上げて少年へと襲い掛かる。その姿を見て少年は何処かで見たような感じに捕らわれた。その結果、見事隙をつかれてその場に跪いた。

「ま、こんなもんかな？」

そして、少年の記憶を奪った機械を作った彼の母親はその頃、研

究所へと入っており、何かを作っていた。辺りには謎の液体などがこぼれていたりもする。

「奥様、何を作ってらっしゃるのですか？」

その後ろで執事は零れたりしている薬品を片付けている。尋ねられた少年の母親は何かを調合しながらどうでもよさそうに答える。

「ああ、これね・・・流石にある程度までは時雨の記憶がないと・・・まあ、記憶を失ったのなら、あの子は後継者からはずすわ。ま、どうせ女の子の記憶はどうでもいいから・・・とりあえず恋愛対象外のやからたちの記憶だけは思い出させておかないといけないわ。」

少しの間、黙り込み再び言葉を選ぶように答える。

「そうね、これで時雨の心がある意味丸分かりだわ。」

「どういう意味です？」

「そのままの意味よ。私が作り終えたこの薬を時雨に飲ませる。」

出来上がったのか三角フラスコを取り上げる。その中に入っていたのは蒼く光る液体であった。

「もしも、これで時雨の記憶に時雨が知り合った女の子のことを思い出したら、その子は時雨から完璧に友達とされているだけ・・・」

「成る程・・・。」

「さ、これを時雨に渡しておいてくれないかしら？ いい、絶対に本当のことを教えてしまったらいけないわよ。」

この薬が本当に大丈夫なのか心配な執事であったが、目の前にいる女性は今まで、一度しか失敗作というものを作り出していない。

「わかりました。」

執事はそういうと、幽霊によつてぼこぼこにされている少年へと薬を渡しに行った。

母親は近くにおいてあった椅子に腰掛けて後片付けをはじめたのであった。

藥品

二十一、

少年が記憶をなくして皆に保護された日の午後である。少年は洋館の庭で皆と談笑をしていた。

「へえ、僕はそんな人間だったのか……。」

どちらかという少年にとっては失望するほうが多い過去話であった。そして、そんな彼らの元へと黒塗りの車が現れる。

「時雨様、久しぶりでございます。」

┐
•
•
•
?
└

「ああ、そういえば記憶をなくしておられたのでしたね……時雨様、これをお飲みください。」

実験場からやってきた執事は鞆からドリンク剤のようなものを取り出した。それには怪しそうな色の液体が詰まっている。

「これは……？」

「時雨様のなくなつた記憶を取り戻す薬です。」

┐
┐
┐
┐
┐
┐
┐
•
•
•
•
•
!
!
┐
┐
┐
┐
┐
┐
┐

「ですが……まあ、どうぞ早くお飲みください。」

「ありがとうございます。」

少年はその薬を飲もうとしてためらった。

「あの、これなんか凄い臭いがするんですけど？」

「良薬は口に苦しです。どうぞ、一思いに飲みきってください。」

少年は躊躇いながらもその液体を再び見下ろした。炭酸飲料なのか怪しげなしゅわしゅわが少年を恐怖の淵へといざなっているようだ。

そこへ幽霊が現れて少年の肩へ手をやった。

「時雨、大丈夫。なんなら、私が口移しでもしてあげようか？」

「な、何言ってるんですか！！」

「そうよ、何言ってるの！？満月さん！！」

妹とメイドはそんなことをいつている幽霊へと抗議の言葉を発した。

「なあに、冗談。」

へらへら笑っている幽霊をジト目で見ながらも妹とメイドは少年に告げた。

「飲んで！！」

「は、はいっ！！」

少年は液体を一気に口に含んで飲み込んだ。

「もぎゃん!!」

そして、体のいたるところから濃密の煙を噴出して目をぐるぐるに回しながらその場に散った。

「時雨、大丈夫か!」

「時雨さん?」

「時雨君!!」

妹、幽霊、メイド以外の三人が少年を抱え起こす。なんだかその顔は妄想に取り付かれている感じでもあり、事情を知らない第三者が見たら病院に運び込むに違いない。

「お兄ちゃんが!」

「時雨様が!!」

「まあ、しょうがないんじゃない?」

最後のは幽霊だ。その三人は執事へと詰め寄った。

「どういことですか!時雨様が泡吹いて倒れちゃいましたよ?」

「大丈夫です。いいですか、時雨様を今すぐに……火の光が当たらないところに連れて行き、体を冷やしておくのです。そして、

夜、月が出たら時雨様を月光に当ててください。」

真剣に言った執事を信じて幽霊以外の人達は少年を抱え込んで洋館の中へ連れて行った。

一人残った幽霊は執事に尋ねた。

「最後のは違うんじゃない？」

「そうですね、最後のは雰囲気的にそのように言ったら神秘性を持たせられるのではないかと思ったのです。満月様といましたか？時雨様をよろしく願います。あの方は、幼き頃より、苦勞をされてきているので・・・くじけるところを知りません。他人の痛みも知ってしまうようなお方なのです。」

「わかりました。この、『満月の騎士』にお任せくださいな。」

「それを聞きまして安心しました。」

そういつて執事は去っていった。その頃、少年の部屋のベッドに少年は寝かされていた。妹とメイド以外は少年を安静にするため、家に帰ったのであった。

「・・・お兄ちゃん、大丈夫かな？」

「大丈夫ですよ。時雨様はこんなところで挫けるお人ではありません。私達メイドの皆は時雨様の噂を良く聞いておりました。」

「・・・・。」

メイドは主人である少年の鼻先をつついて部屋を出て行った。そ

の仕草が長年恋人にしているような感じだったのでむっときた妹も対抗するかのように少年のほつたを引っ張りまくった。

「うん。」

少年は苦しそうな顔になって誰かに助けを求めているようだった。ほつたをつねるのにも飽きたのか今度は段々と寝ている少年へと近付いていつている妹。その顔が赤くなっていき・・・誰かに言い訳をするように告げた。

「お、お兄ちゃんが一人で寝ていると苦しそうな顔をしてたんだからきつと、一人で寝るのが怖いと思ったんだよ！！だからさ、だからね・・・。」

そういつて妹は少年が寝てもまだ、面積が多く残っているベッドへと体を割り込ませたのであった。

「たまにはいいよね？誰も見てないし・・・。」

欠伸をして少年にくつついて寝息を立て始めた。

「おやおや、ご兄弟そろって昼寝ですか・・・。」

様子を見に来た幽霊は寝ている二人を眺めて空中をさまよった。別に眠かったわけではないが、幽霊も少年のもとへと向かい、その上に眠った。

「ううん、やっぱり時雨はいい宿主だ。木刀に追い出されて誰に憑くべきか迷ってたんだけど・・・時雨に憑いて成功だったな。」

幽霊はそう呟いて眠った。妹は時折、にへらと笑っており、少年も時折、にへらと笑っている。ここいらが血が繋がっていないが兄妹といったところだろうか？

「鈴様・・・あら？」

一向に部屋から出てこないで部屋の外で待っていたメイド（幽霊は普通に壁を突き抜けて現れた。）は静かに寝ている三人組を見てもやっときた。マスターの頭にボールを全てぶつけたくなっている状態である。妹のもとへと近付いていき、ベッドから引きずり出そうと思ったがやめた。別に幸せそうに寝ていたからではない。

「まあ、他の方々が起きなければいいんですし・・・今日は誰も来ませんよね。ならちよつとだけ・・・。」

そういつてベッドに入り込んで妹よりもかなり近くに引っ付いて少年のほっぺたにすりすりしながら目を瞑った。

それから、数時間後、辺りは真っ暗になっており、そろそろ月も出ている頃であった。そして、寝ている四人の中で一番先に目を起こしたのは少年であった。

「・・・ん？」

目を覚ますと四人の女の子が・・・寝ていた。

「・・・鈴と、満月さんと、美奈さんと・・・後は・・・この女の子は誰だ？」

少年は一番小さい感じを受ける少女を見た。何故、女の子だと思ったのかは服装が黒いドレスだったからだ。カーテンを閉めていな

い窓からは月光が綺麗に当たっており、それは、その少女の姿を映し出していた。

少女は漆黒のドレスをまとい、髪は金色だった。まるで静養人形のような感じを受けるが、なんと、その顔には狐のお面をかぶっていた。

だが、静かに寝息を立てているだけであつた。

「……………」

少年はどうしてこんなことになつたのか思い出してみようとして思い出すことが出来なかつた。道端に落ちている本を拾おうとしてそこからの記憶が全く残っていない。

ぐうーと、自分のお腹がなつたのに気がついた少年は他の女の子たちを起こさないように注意しながらベッドから抜き出して調理場へと向かつた。何故だか、月明かりで洋館の中は電気が必要なかつた。少年は経済的だとのんきに思いながら窓の外に広がっている巨大な月を見ながら調理場でみんなの料理を作り始めたのであつた。

一方、少年の部屋で二番目に目を覚ましたのは妹であつた。

「……………ん??」

目の前にあるのは少年の顔ではなく、メイドの寝顔であつた。そして、それを見て何があつたのかを思い出す。

「あ……………」

そして辺りを見渡すが、少年の姿はない。外に見えるのは大きな月だけだつた。他にもベッドにはもう一人寝ている人物が居たのを見つけて、結局、全員が少年のベッドで寝ていたのかと妹は思った。

「はぁ・・・ところで、兄貴はどこ行っただろう？」

妹は少年が見ていた狐のお面をかぶった黒くてふりふりの少女を見かけることなく、その部屋を去ったのであった。

次回、とうとう・・・人形の話になるかもしれない！

人形

二十二、

少年が記憶を取り戻してから何事も無く、二日ほど、時間がたった。少年はいつものように学校に行き、二人しか居ない、教室で授業を受けていた。ふと、青空の広がる窓の外を眺めていると小鳥が二匹ほど、飛んでいった。のどかでいいことだと少年が思った瞬間、その小鳥は下、つまり地上から伸びてきた黒い触手のようなものに掴まれて地上へと落下していった。

「・・・・・・・・。」

少年は数学の先生の話聞きながらも今、自分の目の前で起きたことがかなり、気になった。もしかしたら、幻覚かもしれない思いついた。かばんの中から顔だけを出して寝ている幽霊を起こしたのであった。

「満月さん、満月さん・・・・。」

「うにゃ？どうしたの、時雨？昼ごはん？」

「ちがいます。すみませんが校庭の様子を見てくれませんか？この窓から見るだけでいいんです。」

「わかった。」

幽霊は一人で喋っている数学の教師を気にしていない様子で隠れようとせず、そのまま窓の外を眺めた。そして、驚いたような顔で少年の元へと戻ってくる。その顔は見てはならないものを見て

しまったと書いてある。

「時雨、大変だ！！なんか、すげえ、奴がいる！！」

大声で叫んだのだが、ちょうどチャイムが鳴ったので何とか紛らわすことが出来た。忍者は先生に呼ばれてちょうど教室から居なくなった。

「見に行こう、時雨！！」

幽霊に片手を掴まれて引きずられながら教室を出ると・・・

「あれ・・・？」

そこは、夜の学校といった感じの光景であつた。外には満月が輝いている。少年と幽霊はその場で固まり、あたりをもう一度だけ、見渡す。しかし、目に映る光景は先ほどまでいた、教室なんかではない。

「異世界？」

「さあ、どうでしょうか・・・。けど、この前・・・屋上に居たときと似てませんか？ほら、廊下のところから満月さんが沸いて出てきたじゃないですか？」

ああ、あつたねえと幽霊は呟きながらそれならばと廊下の暗がりの部分へと目を移す。

「ほら、今回もなんだかとてもえげつない生物が出てきたよ！」

影の部分から、人型であろう・・・黒い生命体が液体のように姿を現し始めた。

「満月さん、どうします!」

「こういうときは、先制攻撃!見てなつて!」

どこから取り出したのか知らないが、ピコピコなるハンマーを振り落として必死に影から出ようとしている黒の生命体を押し返していた。その光景はプールから出ようとして友達から押し戻されているような感じに少年は見えたらしい・・・。だが、黒の生命体は他のところからも姿を現し始めた。幽霊はいい加減、つかれてきたと見える黒の生命体を開放し、少年へ告げた。

「時雨、やっぱり無理!!ここは逃げたほうがいいと思う!!」

「そうでしょうね・・・。」

最後につかれてしまった黒の生命体をピコッと叩いて幽霊は時雨とともにその場から逃げ出した。走りながら、少年は幽霊に尋ねる。

「満月さん、さっき・・・校庭に何が居たんですか?」

「ん?ああ、あれね・・・黒くてフリフリの服を着た西洋っぽい、女の子が居たよ。仮面をつけてたねえ。狐の・・・。」

そこまでいって、一旦二人とも男性トイレに姿を隠す。鏡は不自然に歪んでおり、何かが出てきそうな感じがする。事実、個室のほうからはなんだかうめき声が聞こえてきている。

「時雨、あの少女は・・・誰だろうね？」

「さあ？」

少年はそういいながら個室へと近付いていき、幽霊は掃除道具箱を開けて何かを取り出した。少年が開けた個室の便器からは黒の生命体が出てきていた。

「ま、知り合いなら・・・顔見れば分かるんじゃない？」

幽霊はそういいながら掃除道具箱から取り出したパソコンで黒の生命体に襲い掛かる。少年はレバーを押し捲っている。そして、黒の生命体は何かに抵抗するかのようなオーラを出していたが、力尽きて流されてしまった。

「時雨、やっぱりここも危険だよ。とりあえず、校庭に出よう。」

「わかりました。でも・・・廊下に出て囲まれたらどうするんですか？あと二つの個室からもうめき声が聞こえてきてますけど・・・。」

少年がそういうと、幽霊はドレスの背中部分から何かを取り出した。それは、いつか見た見た極細の西洋の剣であった。水を得た魚のような感じをかなり受ける。

「邪魔するものはこれで皆、なぎ払うってのはどうかな？」

「わかりました。やってみます！！」

少年は幽霊から剣を受け取ると、廊下に出て、階段のあるところ

へ全速力で走り出した。途中、邪魔をする黒の生命体は少年の、

「峰打ち!!」

気合の入った峰のない西洋の剣で一刀両断された。少年の目は満月のような輝きを持っており、もはや・・・誰も少年を止められないようであった。

「やるね、時雨? いや、やりすぎだろう・・・。」

少年が走り去った後を数歩遅れで幽霊が通り抜けるのだが、黒の生命体がたくさん転がっている。倒された黒の生命体はまた、闇の中へ帰っていつていた。中には手を振って消えるものもいる。

「上に行くんですか、下へ向かうんですか!」

「気分的に上!! 屋上に行こう!! 屋上から攻める!!」

幽霊は幽霊なのでどんなに高いところから飛び降りても死なない。しかし、少年が少年だと言うことを忘れていた幽霊はいつもの感覚で答えてしまい・・・少年はそのまま屋上へと続く階段を二段跳び、たまに三段跳びで駆け上がっていた。階段でも影の生命体はもじやもじや・・・ではなく、うじゃうじゃ出てくる。

「くそーっ!!」

少年は必死に剣を振り回して奮闘しており、後ろから襲い掛かってくる黒の生命体は幽霊が相手をしていた。

「うん、うん、あんたもきちんと彼女の相手をしてやらないからい

けないんだよ？いい、彼女には優しくしなよ？」

少年の相手をしている影の生命体は場所が狭いため、二列にきちんと収まっており、余ったスペースでは後、何分待ちだとか、コンボ数を表示しているプレートを持った黒の生命体もいた。暇なのだろうか？

それから、数分後・・・やけくそになったのか知らないが、少年は刀を槍みたいに構えて長者の列の中へと光を出しながら突き進んでいった。その光に当たった黒の生命体は薬をやっている患者のような幸せな顔で消えていった。そのままの勢いで少年は屋上へと突き進む。

「うおおおお！！！」

屋上のドアを壊して、少年はようやく、動きを止めた。空にはおきな満月が姿を現していた。

「・・・・はあ、はあ、はあ・・・・。」

「時雨って意外と激しいんだね？満月、ときどきしちゃった！きゃっ！！！」

少年の周りをふらふら飛びながら幽霊は軽口を叩いていた。少年はあんなに数が居たのに息一つ上がっていない幽霊に敬意の心を持った。実際、黒の生命体と話をしていただけなのだが、少年はそれを知らない。

「ほら、あれが・・・ボスみたいだね？」

「・・・・！！！」

少年は剣を持って立ち上がった。二人の目の先には狐の面に黒のフリフリドレスといったアンバランスな姿の少女が立っていた。それぞれの考えを持っていたのか、三人は黙り込んだ。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・。（一体、彼女は何者なんだ？まさか、あれがばあちゃんたちが言ってた存在？）」

「・・・・・・・・・・。（よっしゃ、他の二人よりも黒丸点が一個多い！！これぞ、勝ち組！！）」

まず、動いたのは幽霊であつた。相手に近付いていつて・・・。

「顔、見せてよ！」

そういつてなにやらお面をはがそうとしている。相手はそれを阻止するかのようにお面を両手で押さえ込んだ。

「見せてよ、見せてよ、見せてよ、見せてよ、見てせよ、せてみよ、み・・・・・・・・ぎゃ。」

今度は幽霊が舌をかんで口を押さえる番であつた。その二人を少し離れた場所で見えていた少年のもとへ、黒ドレスの少女は近付く。

「・・・・・・・・時雨さん、お久しぶりですね？」

とても澄んだ、引き込まれそうな声であつた。もしも、引き込まれたら二度と戻ってこないだろう。しかし、少年はまだ引きこもつ

ている場合ではなかったので平常心で聞いていた。

「君、誰？」

黒ドレスの少女の後ろから幽霊は再び襲い掛かり、仮面を剥そつとがんばっている。

「見へへよ、見へへよ、見へへよ・・・」

滑舌がおかしい幽霊を相手に、再び黒ドレスの少女はお面を押さえ込んだ。

決闘（前書き）

久しぶりの更新となりました。

決闘

二十三、

少年は幽霊を後ろから羽交い絞めにしてとりあえず動きを抑えた。

「満月さん、落ち着いて下さいっ!」

「じれったいんじゃあ!!その仮面をとれやあ!」

ものすごい剣幕でそのようなことを申すので黒ドレスの少女は屋上の隅っこでがたがた震えている。

「ほら、怖がってますよ。」

「いや、あれはきっと誘ってるのよ。ふふふ・・・時雨ではなく、私をね・・・いじめてくれえって言ってるのよ。」

適当なことを言って少年の包囲網から抜け出そうとしている。

「満月さん、とりあえず詳しく話を聞いてから仮面をとるかどうかが決めましよう?ほら、もしかしたら話の途中で取るかもしれませんですよ。」

少年が幽霊の耳元でそう言うと、不承不承幽霊は頷いた。

「わかった、時雨がそういうのなら信用しようじゃない。」

大人しくなった幽霊を連れて、少年は未だにめっちゃがたがた震えている哀れな黒ドレスの少女の元へ移動した。幽霊が彼女に近付

くごとにびくつと震えている。かわいそうだ。

「ほら、満月さんがそんな怖い顔してたらまた逃げちゃいますよ。」

「む、別に普通の顔だよっ！それで怖いと思うなら、元からこんな怖い顔なの！ほっというてよ。」

ふんとそっぽを向いた幽霊にやれやれといいながら黒ドレスの少女に尋ねた。

「えーと、君は誰？」

「・・・わ、私は・・・」

ぎよろぎよろ動いている幽霊の目なるべく見ないようにしているのか、お面の間から見える目は少年を捉えて放さない。というより、目をちよつとでも幽霊のほうに動かしたら目で、仕留められそうである。

メンチを受けながら、黒ドレスの少女は少年の右腕を掴んだ。

「私の名前は、フィール・トロワドなの。」

「「トロワド!?!」」

それは無いんじゃないのかと少年は幽霊を見て幽霊はドレスの少女を見ていた。

「満月さん、貴女の名前って・・・」

「満月・トロワド!じゃ、この少女は私のご先祖様!?!」

相手もこのめちゃくちや顔が怖い幽霊が自分の家系の末端だと知ったのだろう。まあ、幽霊なので故だろうが……。

「……しかし、貴女は何故、僕の前に姿を現したんですか？」

「理由は簡単です。貴方が私の夫になるのにちょうど良いと思ったから、私の世界へとご招待したのです。」

「私はご先祖様の妻になるために呼ばれたの？」

幽霊は自分の方向を指差しながら黒ドレスの少女へと尋ねる。尋ねられた黒ドレスの少女はそれには首を傾けて唸っている。

「うーん、それはちょっと理解できませんね。何故、貴女はここに来たんでしょう？まあ、どうやら私の血筋なので出てくることが出来たんでしょうね。」

「ところで、お面はとらないんですか？ご先祖様？」

既に関ろから襲い掛かるような格好で幽霊は準備オーケーである。いや、既に襲い掛かったと記述するべきだろう。

「きゃあー!!」

「ふははははっ!!敵将、討ち取ったりい!!」

狐の仮面を月に掲げ、幽霊は相手の顔を見る。

「あ、普通に美少女だ。それ以外の何者でもないねえ。」

幽霊の言つとおり、黒ドレスの少女は美少女であつた。しかし、今では幽霊に仮面を取られたので涙を流している。まあ、なんだかとっても近くに痛いような雰囲気させる感じを出しており、こんなのもいいなあと世の男子は言うかもしれない。

「なんで、こんな仮面を被つてたんですか？」

「それは・・・その昔、私が・・・まだ人間だつた頃ね、ちょうど日本に来て一人の男の子に恋をしたの。それから私はその人に想いを伝えようというろががんばつた結果、想いは・・・通じらなかった。」

「何故？」

「簡単よ、私の顔が趣味に合わなかつたみたいね。」

そんな簡単な理由で仮面の一つをつけてんじゃねえよと幽霊は言いたかつたが、抑えた。

「じゃ、それが理由で・・・」

「そう、だから今のところは時雨さんに心を奪われたままなんです。不束者ですが、よろしくお願いします。」

「え・・・。」

少年は別に可愛いからいいかなと思つており・・・まあ、相手は既に人間ではないようだが、承諾しようとしていたところ・・・。

「ちょっと待った、時雨は私の騎士だからそう簡単にははいはいと

渡せない!!」

「騎士？時雨さんが貴女の方？」

「ええ、そう。私は時雨に護ってもらって初めてこの姿をこの世に現せるの。つまり、時雨の心が私のようなもので、私の心と時雨の心は一心同体じゃなくて、二心一体なのよ。時雨、帰るよ。」

「え？あ、はい・・・わかりました。」

おずおずとそれに従いつつ少年は黒ドレスの少女にお別れを告げた。

「すいません、貴女に好かれたのはかなり嬉しいんですけど・・・どうやら僕はあの人の騎士だったようです・・・。」

黒ドレスの少女はにこりと笑い告げた。

「大丈夫ですよ、時雨さん。私は他に貴女に女が居ても気にしません。どうぞ、ゆっくりしてってください。」

そういつて少年の右腕を掴む。左腕は幽霊がしっかりと掴んでいるので綱引き状態となった。少年は少々、困ってしまったて二人を交互に見やる。

「ご先祖様なのに今更、恋に未練を持たないでよ!!」

「ふふ、それなら貴女も同じです、貴女だって死んでるんですからね。」

まあ、両方とも幽霊なので戸籍は既に無い。一つ的手段として両方をとるという手もあるが、それは人としてどうかと思うのでやめておこう。

「待った！これ以上やったら僕の腕が引きちぎれますから・・・何か勝負をして決着をつけてください！！」

「勝負？望むところ！！」

両者少年を放して後ろのほうへバックステップをして間合いを取った。中心にはどうにか立ち上がった少年がどうなるのかと隅っこに移動した。二人の手には同じような西洋剣が握られている。少年は別に持っているので幽霊はどうやらどこからでも剣を出せるようだ。

「ふふ、貴女は先程、二つの心に一つの体といいましたからどうぞ、ハンデとして時雨さんにご協力してください。見せてもらいます。」

「ふん、余裕なのは今だけよ。時雨の力はあるたが出してたそんじやそこいらのまっくろ。ろすけとはお話にならないわよ。時雨、手伝って！！」

「わ、わかりました。」

少年はいやだとか言わずに剣を持って幽霊の元に行く。少年が幽霊の元へ近づくと、幽霊は金色に輝きだした。

「ふふふ、見せてあげるわ、『満月の騎士』の力を・・・。」

幽霊が何かを唱え呟くと少年の体から青い光があふれ出てきてい

た。そして次にいまや金色となってしまった幽霊の色が剣からもあふれ出す。

「さあ、ガチンコ勝負よ！！頑張つて、時雨え！！」

「見せてもらうわよ、貴女の力を！！」

「えええい！！！！こうなつたらやけだあ！！」

少年と黒ドレスの少女は剣から火花を散らして鬨ぎ合った。若干、少年がおされ気味なのは年季が違ふといった感じであろう。

「さて、これからが本番！時雨！！行くわよっ！！避けられないなら避けなくていい！」

あろうことか、幽霊は持っていた剣を投擲した。二人は巨大な力で真っ向から対峙していたのでとつさに避けることができず……

ぶしゅっ！！！！

「ぎゃーす！！」

「ふふ、これぞ、愛し合っていた二人の繋がった瞬間ね……」

剣は両方の背中に刺さっており、黒ドレスの少女は結晶となって消えていつていた。

「……見せてもらったわ、貴女の想い……。だけど、今度私が生まれ変わったら貴女を倒して見せるから……」

「はは、それならいつか、また会いましょう。成仏してね、ご先祖様。」

一筋の光が月へと向かって飛んでいくようにして消えていった。少年は自分にささっている剣を抜き出そうと努力しているが、触ることも出来なかった。

「大丈夫、それはただ単に力をこめて作っただけだからさ、人体に支障は無いって。ま、時雨の心が汚いなら先程のご先祖様のようになっただけだね！さ、帰ろう、私の騎士。」

決闘（後書き）

ええと、先に予告しておきますが、次回で最終回です。今まで応援してくださっていた皆様、ありがとうございます。終わり方はちょっと暗いかもしれませんが、よろしく願います。

満月（前書き）

これで最後です。終わりがたはちょっと切ないです。

満月

二十四、

少年はこの世界に戻ってこれたことにちょっとほっとしながら幽霊の隣で昼ごはんを食べ始めた。あつちの世界では暴れまくっていたのでつかれたのと言わずと知れている。幽霊はそんな少年と話していた。

「まあ、時雨もこれで呪いが解けたわけだよねえ？もしかしたらこれからもてるかもよ？」

「どうかなあ？もてないんじゃないですか？」

弁当をさつさと食べ終わると少年は弁当箱を片付け、教室に誰も居ないことを確認してから携帯電話を取り出した。この高校ではマナーが悪いということで携帯は使用禁止となっており、使用していると見つかった場合は奉仕活動をしなくてはならない。これまで、かなりの数の生徒が奉仕活動を行ってきたのはこの高校にまともな連中が少ししかないせいかもしれない。

「・・・あ、母さん？うん、うん、それよりさあ・・・送ってもらいたいものがあるんだけど・・・え？ありがとう。じゃあね。」

何かをひとしきり話した後、少年は電話を切った。

「自分のお母さんに電話してたの？」

「まあ、ちょっと用事があっただけです。家具を送ってもらっただけですよ・・・。」

その日、残りの授業は全て平和に終わり、髪の毛を黒い触手のように飛ばしてすずめを取る物騒な少女はもう現れなかった。

そして放課後、家に帰った少年の部屋にはもう一つのベッドが置かれていた。

「これ、誰の？」

「満月さんですよ。ほら、剣が変わってから入れないって言うたでしょ？だから用意してもらったんです。」

何故だか知らないが幽霊は西洋の剣に入り込んで寝ることができなくなってしまったのだ。

寝るときは仕方なく、少年の隣で・・・寝相の悪いことが判明した幽霊は寝ている少年相手に格闘を繰り出してきていたのであった。少年が寝ている間に怪我をしていたりと、それはちよつとばかり粹な寝相であったのだ・・・これ以上、生傷は作りたくない少年は母親に頼んでもう一つベッドを用意してもらったのであった。

「わあ、ありがとう、時雨！！」

引っ付いて無邪気に喜んでいる幽霊に微妙に罪悪感を感じながらも少年は頭を掻いた。

「いえ、いいですよ。満月さんには僕の知らない世界とかを教えてくださいましたし・・・それに、満月さんと居ると楽しいですよ。」

「時雨え、ありがとう。」

少年の胸に顔を埋め、幽霊は嬉しさのあまり泣いていたのであつ

た。そんな幽霊を見ていると少年は本当の理由が寝相が悪かったからとは言つことができない。苦笑しながらその場を乗り切るしか出来なかった。無力である。非常に無力である。

「時雨様、満月様、夕ご飯が出来ましたよ？来てください。」

「あ、わかったよ、美奈さん。満月さん、行きましょう?」

「うん。行こう、時雨?」

片時も離れたくないといった感じの幽霊である。少年はマジで取り憑かれてしまっているようだ。

「時雨、ずっと一緒に居ようよお。すりすり。」

「ま、満月さん・・・当たってますって!」

「「・・・・・・・・」」

そんな二人のやり取りを見て、妹とメイドは面白くないのかじつと少年を見ている。目がどこと無く怖い。

「兄貴、べたべたしないでくれる?」

「そうですね、時雨様。いちゃいちゃしないでください。」

「え?べ、別にいちゃついてないよ。」

幽霊は黙って少年の背中に頬を当ててすりすりしている。少年の顔が真っ赤になるにつれて二人の眉毛が危険な角度に変化していっ

ている。

「・・・いちゃいちゃしてないんだよね？」

「うん、してないよ？」

「私がそんなことをしても文句ないよね？」

「ま、まあ・・・。」

少年の了解も得て、妹は少年の膝の上にとった。妹の顔も真っ赤である。

「時雨様、無礼をお許してください。」

「え？」

今度はメイドが時雨の肩に抱きつくように引つ付いた。囲まれたような状況で、少年はなかなか精神が安定しない。先程から心臓の鼓動が早くなっているようである。

「今日の皆、何処がおかしくない？」

「「大丈夫。普段どおり。」」

それぞれ少年に対してやりたいことを始めていたが、少年の理性のほうに崩壊しそうだったので少年は力ずくでも三人を引っぺがして風呂場に逃げ場を求めたのであった。

少年が湯船に浸かっていると誰かがやっぱり、入ってきた。

「時雨、背中流しに来たよ？」

「ま、満月さんっ！！何しに入ってきたんですか！！」

何を言っているんだ、こいつはという目を驟雨に向けて幽霊は答えた。

「背中を流しに来たっていったじゃん？」

「結構ですよ。一人で出来ます。」

少年は前を隠して必死に説得を試みる。だが、相手は説得が通じるような相手ではなかった。それは少年もちゃんと理解していたつもりである。

「ふふ、時雨は可愛いなあ。そういうところが好きだよ。」

「ぼ、僕は満月さんのそういうところが嫌いですっ！！今すぐ出て行ってくださいよお！！」

なおも近付いてくる幽霊に少年は必死で説得していたが、諦めて幽霊とは反対のほうを見て湯船に使った。それを許可のしるしと受け取った幽霊は少年に引っ付いた。

「時雨、今日は満月だからお風呂から出たら庭でお月見でもしよう。」

「わかりました。そういうことなら先にあがりますよ。」

少年はそういってお風呂を出たのであった。そんな少年の後姿を

見ながら幽霊は静かに笑っていたのであった。

そして、幽霊に言われたとおり今日は満月であった。あちらの世界で見た満月とはまた違った感じの満月である。

「・・・・・・・・。」

「時雨、お待たせ。」

幽霊はいつものフリフリドレスを纏って少年のところへとやってきた。少年は風呂場でのことを思い出して顔を背ける。

「・・・・時雨、悪いけど・・・・私の顔を見てくれる？」

「・・・・はい。」

少年は正直に幽霊の顔を見た。幽霊の顔は普段から青白かったが、今日はいつにもまして顔色が悪かった。それになにやら嫌な予感を覚えた少年は幽霊に尋ねる。

「満月さん、顔色がいつもより優れないけどどうかしたんですか？」

「はは、やっぱり気づいちゃったか・・・・。時雨、一方的にこれまで君の近くに居ただけ・・・・それも、今日までみたいなんだ。」

その言葉を聴いて少年は固まった。

「ど、どういふことですか！！」

「そのまんまの意味。なんだか知らないけど、私がここで遣り残したような感じの事は全部終えたらいいんだ。私が死ぬ前、何を思っ

ていたのか今では全く思い出せないけど……今は幸せなんだ。
時雨、今日でお別れだと私の中の何かが私に告げてるんだ……」

「そ、そんな……。」

「だからさ、私は時雨と会えたことを嬉しく思うよ。私の事を時雨がどう思っているか知らないけど、私は時雨の近くに入れて嬉しかった。」

幽霊の体は満月に当てられて輝いていた。幻想的なその光景に少年は見入っていたが、今日で幽霊とお別れというのも何故だか、嘘だと思っていた。

「まあ、私は幽霊だから……成仏するってことなんだろうね。今度は、平凡な一般市民に生まれ変わろうと思っているよ。」

「そんなこと出来るんですか？」

「さあね？出来ると思えば何でもできるよ。だからさ、また……時雨と会えると私は信じてる。いつ、会えるか知らないけど……また、いつか会えると思うんだ。」

幽霊の姿はどうかやら満月の光を浴びる間に段々、薄くなっていた。少年は幽霊を抱きしめ、最期に何かを伝えようとした。

「満月さん、僕は貴方に会えて幸せでした。これからも、貴女が隣に居てくれると思っていたし、それが僕の願いかもしれません。だけど、貴女が居なくなるのもしょうがないかもしれない……。」

「ふふ、時雨にそういわれて私は嬉しいよ。ありがとう、私の騎士・

・・。
」

完璧に薄くなって目を凝らしても見ることは出来ない幽霊を少年は力の限り、抱きしめたのであった。しかし、それもずっとは続かず、幽霊は完璧に消えたのであった。少年は意外と短かった幽霊との生活を思い出して流れる涙を満月に光らせたのであった。　　（終？）

満月（後書き）

自分的にはちよつとばかり終わりがたがくらかったなあーと
思っているのですが、どうだったでしょう？

未来（前書き）

蒸し返すような感じですが、完結話を書きました。ずっずっしいです。がこれで本当に終わりです！

未来

終、

満月さんという幽霊が成仏して一ヶ月という月日が経ちました。その日も満月で……。僕は夜中に目を覚まし、体中に汗が吹き出て……なにやら怖い夢を見ていたような気がしてならなかったのです。しかし、急に尿意をもよおした為にトイレに向かうことにしました。夜寝る前にお茶を飲みすぎたのが原因だと思われます。まあ、その昔似た様なことがあってお漏らしをしてしまっていたこともよくありました。勿論、小学校に通って一年程度の話です。

「うっん、高校生にもなってお漏らしはさすがにやばいかな？」

今では一人暮らしとなっている洋館に自分の独り言が響いていきます。まあ、僕にはその昔に成仏していなかった幽霊が執り憑いていたので幽霊自体は怖くないのですが……。一人はさすがに寂しいと思いました。あの人が居たならば、きっと何か僕を馬鹿にするようなことを一言でも言ったんじゃないかな……。そう、考えます。

この洋館には後二人本当だったら人がいたのですが今日はそろって用事があるので明日にならないと帰ってこないとのことでした。

「……。おお、よくでるなあ……。。」

ニリットルのお茶を一気飲みしたのが原因なのか……。はたまた一人が寂しかったのかは知りませんが結構な量が出てしまい……。量に比例して夜中は不気味なトイレにいる時間も長くなってしまいました。虫の鳴き声が聞こえてきて、肝試しをするのにはベストな条件だな、そう思っています。

「……トイレに存在しているお化けの事を思い出すなあ……」

一時期小学校の頃に流行っていた学校の怪談を思い出しまして・再び背筋がぞくつとしてします。さつさとしてしまおうと思いましたが、あせってしまつてなかなか終わりません。さらにあせってきた僕はまたまた独り言を口走つてしまい……誰かにたずねたりもしてしまいました。

「はは、どうなっているんだろうね？」

「飲みすぎなんじゃない？」

「……!!」

突如、僕の後ろから誰かの声がしました。今、この洋館にいるのは僕しかいません。さきほども言ったとおり後二人いた人も用事があつてこの家にはいないのです！帰ってきたとしても既に寝ている時間……あの二人が夜中に起きることはこれまでなかったことでした。朝までぐっすり、起こしに行っても目を覚まさないほど睡眠欲が強い二人です。

「……。」

既に用は足しましたが、今度は部屋に帰る勇気が、いや、後ろを振り返る勇気すらなくなつてしまいました。膝は先ほどから震度を上げており、その影響かわかりませんが脳内はマグニチュード7, 5程度のパニック状態。今の僕に出来たことはズボンを上上げることだけでした。

「・・・全く、人がせつかく戻ってきたって言うのにつれないなあ。会わないうちに臆病になったんじゃないの？」

人をちよつとだけからかっているような声がして僕はこんな口調の人をひとりだけ知っていることを思い出しました。しかし、その人は既に天に召されているはずであり、この世にはいないはずなのですが・・・。

念のため、そのままの体制で後ろの誰かに僕は尋ねました。

「・・・ど、どなたでしょう？」

「もう、声まで忘れちゃったの？わ・た・し！！」

「たわし？」

「違う、満月だよ！！」

恐る恐る振り返ってみるとそこに立っていたのは……確かに一ヶ月ほど前に僕の前から姿を消した、僕だけ残して消えてしまった……まぶしいほどの美少女の幽霊でした。

「あ・・・ま、満月さん？」

「そ、お久しぶり・・・私の騎士。しっかりしてよ？」

いつも着ていたドレスを纏い、窓から差し込む月光を受けて……幽玄のように佇む満月さんは以前にあったときよりも輝いていた。でも、僕には彼女がぼやけて見え、更に幻想的な光景に拍車をかける……涙が、うれしいのか、怖すぎて流しているのかさっぱりわからないけど、彼女の姿をぼやけさせる。

「こらこら、男の子が泣いちゃ駄目でしょ？」

「……満月さん……おかえりなさい。」

僕はそのまま満月さんを抱きしめていた。彼女が幽霊だったのを忘れて……

「うん、ただいま。まあ、実際のところはどこにも行ってなかったんだけどね？あいたたた、苦しいよ……時雨。」

「……満月さん……僕は……離しませんよ。僕は……寂しかったんです。」

何故、彼女を抱きしめられたのか知らないが僕は満月さんから離れなかった、誰かが僕と満月さんを引き離そうとしても僕は、絶対にもう、彼女を離さないと今、決めた。

「ははは、実のところさあ……私はちょっとばかり訳ありの体質でね……体を封印されていたんだよ。ほら、しがみついてないで離してよ。きちんと説明してあげるからさ。」

満月さんにそういわれたので僕は従った。とめどなく涙があふれ、頬を流れていってしまう。

「……全く、弱虫になったんだねえ。」

「……違います、ちょっと懐かしいと思っただけです。」

とりあえずトイレを出てソファーに座って話す事にした。ずっと

ずっと、待ち焦がれた、一ヶ月間、一人だけの時間を過ごしたけどそれは……満月さんに会うための準備期間だと思えば、楽になれたのかもしれない。

「……ちよつと前にね……姉に封印されちゃったんだよ。実のところ私は人間じゃなかったからね。」

「え……?」

「私、結構前に色々と暴れちゃったんだ。まあ、正体って言っても……分からないだろうから省略させてもらっけど。」

「……それで……ずっと封印されていたんですか?」

頷き、顔を僕から背ける。

「そうだよ。爺ちゃんの持っていた木刀に封印されていてさあ……ちよつとばかり記憶がなくなっていたんだよ。とりあえず時雨に頼って生きてこれただけだね。まあ、それがどうにもいけなかったって訳じゃないんだけど……。」

かなりどつちつかずだ。一体全体どうしてしまったのだろう……。

「……時雨と一緒に入れて幸せになれたんだよ。これだけは真実だね。幸せになったおかげでさ、姉さんに許されたんだと思う。幸せになれるって言うのがこれほど難しいなんて私はぜんぜんわからなかったけどね。ともかく、一年たった今ようやく?封印を解かれたんだ。だからさ、今の私はきちんとした私の体だよ。」

確かに言われてみれば全く透けていない。いやいや、透けるといつても体が透けていない。勘違いしないように書いておこう。

「・・・満月さんあのう・・・これから一緒にいてくれるんですか？」

僕は遠慮がちに尋ねてみた。既に幽霊ではなく、生身の体だ。彼女にも都合があるのかもしれない。おじいさんのもとへと向かえばちゃんとした家に住むことだって出来るはずだし。

「そうだねえ、それは時雨しだいだと思う。時雨と一緒にいた頃の私は実体なくて、木刀に隠れていたりもしていたからね。今じゃ、生身の体だからずっと時雨と一緒に居れるって訳じゃない。だけどまあ・・・」

ちらりとこちらを見て顔をうつむかせた。

「・・・私と一緒にいても構わない、迷惑がかからない、幸せになりたいっていうのなら私は一緒にいてあげてもいいと思ってるよ？」

言葉を言い終わると顔を朱に染めて僕の頭上を見るような感じでこちらに視線を向けている。空気がかなりぴりぴりしてきており、どうにも居心地が悪かった。彼女は僕の答えを待っている。

そして僕が言えることは唯一つだった。

「・・・満月さん、いつまでも僕に憑いて来てください。」

そう、言ったのだ。それ以外に答える言葉を僕は持っていない。
僕の言葉を聞いて、満月さんはにこっと笑う。その表情を、きっと僕は忘れることなんてしないだろう。

「……よろしい、いつまでも私は時雨に憑いて行つてあげるよ。
時雨、改めてよろしくね?」

次の日以降、僕が毎日見ていた悪夢はぴたりと止み……。たまに悪夢を見ても目が覚めたら必ずハッピーエンドになるようになった。

「……時雨、早く起きないと遅刻しちゃうぞ?」

だって、彼女が常に僕を起こしてくれるから……………。

〈満月の騎士 終〉

未来（後書き）

メッセージをいただいて書きました。短編として出すにはちょっと話がわかりづらく、終わらせるならきちんとこっちで終わらせたほうがよかったと思ったのでこうしました。今はきれいに終わらせたいと思うのでうれしいです。メッセージをくれた方（了解を取っていないんで伏せさせてもらいます）ありがとうございます！！これにて、本当に完結です！！ご迷惑をおかけしました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3460b/>

満月の騎士

2010年10月20日13時31分発行